

亞に於ける種々なるアルタイク國民の間に存する、或種の宗教的集中力を證明するに足るべし。然れども此名稱は、以て此等のアルタイク國民と支那古代の住民との間に、そが史蹟以前の通有的崇拜の存したりしことを證明する能はず。支那の所謂天は、天空、天空の神、一般の神なる三種の意味を有し、北部チーレーニアン族の間に行はれたるデユマラの神の意義と當に相對照せらるべきものなり。さりながら斯の如きのみ説明にては、猶ほ未だ完全なりとなすべからざるを以て、能ふべくんば支那、蒙古、韃靼等に於ても、伊太利及び印度のデユビターなる名稱 バビロン 及び バレスタイン のエルなる神の名稱を見出だすが如く、この神の名稱の同種なる形體を證明せずんばあらざるなり。

以下漸を追ふて此形跡の證據を掲擧せんかな。已に説けりしが如く支那語は單綴音の國語にして、後世のチーレーニアン族の各方言は、語根の連合的狀態に達したるものなれば、則ち派出的接尾語を使用したりき、是れによりて之を考ふれば支那に於ける天なる語の形跡は、少くとも之をチーレーニアン族の中に、て主要なる國民の言葉の中に、差したる困難なく發見するを得ん。蒙古語の「テ

## 支那語と蒙古語との比較

ングリなる語は、初め天空を意味し、後天空の神の意味となり、遂に降つて一般に神なる意味をなすに至り、最後には善靈又は惡靈若くは惡魔なる意味に用ゐらる。

此發見は頗ぶる緊要のことに屬す、何となれば其他の事柄に於て確定する能はざる議論を此發見によりて確定し得るを以てなり。吠陀の頌歌とドヴァナに於ける尼僧の祈禱との間に、最高神の同一名稱を發見し得たるにあらずんば、印度人が印度に入り、又鳩がドヴァナの頭に飛び降りし以前、已に久しく崇拜せられたりし神の人格が、もと同一觀念に基づくものなりしことを信ずる能はじ。此例は移して以て支那語の天と蒙古語のテングリとの關係に適用せらるべし。

此二語の關係は、管に以上の説明に止らず。偶然なる機會によりてテングリなるチーレーニアン名稱は、近代蒙古語よりも更に舊代に屬する蒙古語に遡りて研究するを得ん。支那の歴史家は、何人の古代史中に、何人が其首長等に捧げたりし尊稱は、テングリ、クトゥ（又はチエン、デユなり）のことを記せり。このテングリ、クトゥは、彼等の國語に於て天の子の意なり。而して支那人も亦其皇

## 匈奴の語

帝を尊稱して天子と呼べり。此點に於て兩國の思想符節契合す。蓋しタンクリクトは神の子の意味を有せず、神の恩恵を受けたる皇帝の意なり。支那にては之を天子と云ふ、是れ匈人のタンクリクトに相當するもの。故に匈人のタンクリクト又は蒙古のテンダリは、支那の天と同一なりとす。

更に翻つて土耳其の祖先のことを支那にて突厥と云へる所の歴史、物語に之を見れば、突厥は地球の精靈を崇拜し、此精靈を、ブテングイリと稱したりとぞ。此ブテングイリなる語の最初の綴りは、地球の意味を有せるものにして、次の綴りなるテングイリは、蒙古のテンダリと同様なる言葉を有す、即ち最初に綴りを附せず、單にテングイリとして用ひられたるは極めて舊古のことに屬し、當時猶ほ已に天、天の神なる意味を失ひ、一般に神及び精靈の名稱として用ゐられたりき。近世のヤクテ語タンダリを見れば、之と類似せる意味の變遷を知り得べし。此タンダリは天空を意味し、神を意味す、然れども西比利亞に於ける耶蘇教の改宗者中に於ては、タンダリは「聖者」なる意味にも用ゐらる。野生の馴鹿はヤクテにて「神の馴鹿」と稱せらる、然る所以は、この馴鹿が廣漠たる虚空中に住し、又は神

突厥

比較の結果

のみが此馴鹿を注意し給へばなり。

茲にも亦アリヤン族並にセミティック族の最初の宗教を確定し得べき同様の證左あり。彼等はそが共通的名稱を有す、而して最高なる神に與へられたる此名稱は、支那の單綴的國語の中にも、亦主要なる北部チベット・ニアン族の語根結合の點こそ異にすれ、正しく支那語と同種なる諸般の方言中にも保存せらる。吾人にして此等の言葉を研究せんか、其中に於て音調と意味とが類似せることを知るのみに止らず、蒙古支那及び土耳其に於ける此等の語の發達を注意すれば、更に此等の語の有機的に同一語なることの形跡を發見し得らるべし。何處に於ても此等の語は初め天空の意味を有し、後神の意味となり、再び降つて諸神及び諸靈の意味とはなりつ。此等の語の意味に於ける這般の變化は、夫等の國民の間に存せる宗教に起りたりし變化と並行せり。即ち支那に於ても亦何處に於ても、苟も無數なる精靈の崇拜と、最高なる在天の神の信仰とを結合せる所の宗教を抱持するものは、共に皆この變化を受けたりしなり。若し夫れ單に音と意味との類似せるをば標準として研究せんか、サモエツド

西藏語

人が最高の神を稱してヌムと云ひし語とフィン人がヂユマ(ラ)と云ひし語及び  
 西藏にて神のことをナムと云とを結合することは、いと容易のわざなるべし。  
 此の如き標準を使用することは、最も切要なる一鏈環たるに似たり故如何とな  
 れば吾人は此標準によりて北部チーレーニアン及び南部チーレーニアン族の  
 各種族中に存せし宗教の根本に於て同一なりし實蹟を證明することを得べ  
 ければなり。然りと雖も西藏語の先行名詞に關し或知識を得るまでは即ち已に  
 前述しけん如く西藏語の有機的發達を知るまでは吾人は斯の如き目的に對し  
 て西藏語を用ふることを得ず。

支那の神

支那の大多數の人々によりて信仰せられたる小なる精靈を研究するとき、  
 此等の小精靈も亦北部チーレーニアン族の崇拜せし精靈と甚だ能く酷似せる  
 ことを容易に看破するを得べし。此等の小精靈は支那にて神と稱せられ、も  
 見るべからざる勢力又は影響にして宇宙に對し或活動をなす際に始めて感知  
 せらるべき者に對して與へられたる名稱にぞありし。或る神若くは精靈は眞  
 正なる崇拜を受け、其威嚴力に従ふて差等あり、此他の精靈は一般に恐怖視し去

支那以外の種族の宗教感覺

らる。疫癘神は驅除せられ、惡魔降伏法によりて退散せらるゝとなす。要する  
 に多數の神は物語として傳はるのみ、現に崇拜せられつゝあらざるなり。神  
 の數や極めて多く、殆ど正算すべくも非ず。今その主要なる部分を示さば、一に  
 曰く天神二に曰く地祇、三に曰く人鬼是れなり。此順序は彼等の威嚴力に従つ  
 て定められたる者とす。天神の中に、日月、星、雲、風、雷及び雨の精靈あり、地祇の中  
 に、山川、田野、穀物、樹木、歲月等の精靈あり。人鬼の中に、皇帝、聖賢、其他公益を興へ  
 たる人士の精靈等ありて、全國民舉つて皆これを崇拜す。此外猶ほ各家族中に  
 幽魂なる精靈あり、特殊なる尊敬を以て取扱はれ、多くの迷信的儀式によりて尊  
 崇せらる。

北部チーレーニアン各種族中にも亦これと同様なる宗教的感情存す、唯だ  
 支那人の嗜好する底の微細なる區別と規律との存せざる差異あるのみ。嘗て  
 記したりし如く、サエツド人はヌムと稱する最高天神を信仰したりき。然る  
 に彼等の間に久しく生活したりしカストレーン氏は述べて曰く、此等のサモエ  
 ッド人の僧侶即ち魔術師によりて祈られた主なる神々は、所謂タデベヂョーナ

り、此神々は空氣、地球、水、其他自然界到る所に住居せり、肉眼を以て見る能はざる精靈たり。予は聞けるとありき、多數のサモエツド人が此等の神々を單に死者の精靈なりと唱へ居れるとを。然れども亦或るサモエツド人は、この神々を下等なる神の階級に屬するものなりと思惟するものもありけり」と。

氏は更に、フィンランドの神話に於て述べけらく、「フィン族の神話には多數なる神々の名稱充滿せり。自然界に存在する各物體は、皆一つのハルティアと稱せらるゝ守護神を有す、而して此守護神は其物體を創造し且つ保護する神なりと想像せらる。此等の精靈は、そが外部的物體に結び付けられずして自在に彷徨するを得、各自特徴ある人格と一の身體及び精神とを有せり。其存在たる單純なる物體の存在による者にあらず、何を以て然るや此自然界には守護神なき物體一として存せざるも、守護神は單純なる各物體に制限せられず、物體の全部を包含するが故なり。かの火山灰も、かの石塊も、將た家屋も各自皆其守護神を有す、然れども此同一なる守護神は、その他のあらゆる火山灰も石塊も將た家屋をも悉く保護し注意するなり」と。

吾人は以上記述したるはサモエツドの神話を論理的の言詞に譯出したるのみ。然らば則ち管にサモエツドの場合に限らず、全般の場合に於ても亦宗教思想及び神話的名稱の發達する中に、如何なる事物の發生したりしかを直ちに理解することを得べし。吾人が稱して一般的概念となすもの又は通常一般的概念要素と呼ぶるもの、即ち「木」と云へるもの、「石」と云へるもの、「家」と云へるもの等の名稱は、實に、一般の木屬、石屬、家の屬を意味するものにして、フィンランド人及びサモエツド人が呼んで守護神又はハルティア、タデベジョーと云ひ、支那語にて神と名付けらるゝものに該當す。吾人は一般的要素と事もなげに云ふと雖も、科學的思想、缺無の人々には、此名稱を呼ばんこと甚だ容易とせざるべし。多くの木若くは、多くの日と云へる時には、その中に森林又は年歲として話さるる場合の如く、或る有形的にして且つ各個的なるものを保有すると知らなん。而して各個物より一般的觀念に移り、直覺的より觀念的に、實際的より抽象的に移る所の此過渡時代に於ては、森の蔭、年の精靈、雲の精靈若くは力及び電光等が人心を支配し、猶ほ嘗て古代の宗教及び神話に於て、所謂神々として立てる所の或る

人鬼禮拜の情  
状

種の生物は、此過渡時代に於て吾人の前に存在を有したりき。祖先精靈は亦北部チーレーニアン族及び支那人によりて共通に禮拜せられたりき。予は此事實をいと切實に主張するものにあらず、他なし死の精靈の禮拜は、恐らくは全世界を通じて分布せる最も廣き自然的迷信の形式なればなり。然りと雖も此死者禮拜の點に於ても亦支那と北部亞細亞との間に何等の差違あるなきを注意せんこと緊要なりとす。即ち此死者禮拜のことたる支那に於ては其支那的宗教の最も特殊なるものと考へられたりしが、此思想は等しく北部亞細亞の間にも行はれたりき。カストレーン氏の云ふ所によればフキンラント並にアルタイクの諸族は、甚だ恐怖すべきものとして畏忌する所の彼の死亡てふとは、全く個人的存在を消滅せしむるものにあらずとの信仰を有したりきと。來世の生命を信仰せざるの徒と雖も、猶且つ死者が生存するものなりと思考したりし事實を指示せる或る儀式存せり。彼等は死の墳墓の上に食物、衣服、牡牛、小刀、火打箱、鍋、櫛等を置く、豈然るのみならんや、若し彼等に強て詰問する時は、彼等は死者が嘗て此世に生存しけるの時になしたりし如く、其死者をして

狩し、漁し、闘はしむることを得せしめんが爲めに、斯の如きものを供ふるなりと自白すべし。ラップ人及びフィン人は、肉體一たび消滅すれども他の新しき肉體又更に下界に於て死者に與へらるゝものなりと想像しき。他の種族にありては又死者は幽靈若くは精靈となりて存在して常に墳墓に止り、若くは死者の國に止るものなりと云ひ、又は特に夜靜かなるに及び、其他暴風雨あるに乗じて、地上を徘徊逍遙するものなりとなす。此等の精靈は、或は風の鳴る音、木の噪ぐ音、或は火の燃ゆる音をなし、其他種々無量なる方策を以て現出す。こは人の肉眼にこそ映ぜざれ、魔術師は能く之を見るを得、精靈の思想を推占することすら得たりき。此等の精靈が人間に害を加ふるものなりと一般に想像せられたりしことは頗ぶる奇妙なる現象なり。就中最も人間に加害するものは僧侶の精靈なりとす。蓋し此等の精靈たるや、安眠を妨げ、疾病と不幸とを送り、自己の親戚の道心を苦ましむ、されば人々は努めて此精靈を近づけざらんとしてあらゆる手段を施したり。即ち死骸を屋外に持ち出せる時、その死人の背後に赤く熱せる石を投げ、以て此死人が再び元の家に還り來らざる呪術なりとせり。又死

者の墳墓の上に累積せる食物其他の種々なる供物は、此死人が再び元の家に還り來りて、此等のものを死人自ら持ち歸るが如き口實を、一切死人より奪ひ去らんとして斯くは供へ附くるなりと或る種族は思考す。チュバツシユ族の中には、親の精靈に其子が犠牲を供ふるの時、次の如き祈禱を捧ぐるとなり、曰く、「我等は汝に美味珍膳を捧げて以て尊崇す、見よ此處には汝の爲に飯其他種々なる食物あり、汝は欲するもの一切のものを有せり、されば決して我等を惱まし給ふこと勿れ、再び我等の端近く來ること勿れ」と。

若し夫れ此の如き供物を受納せざらんか、死者は必ず疾病其他の不幸を送りて復讐をなすものなりとは、是れ一般に信仰せられたる所にぞありし。古代の匈奴即ち何人は戦争にて得たる捕虜を殺すに、其捕虜の將軍の墓前に於てせり、然る所以のものは何ぞや、精靈の怒りたる、若し爾かく爲すにあらざんば決して寛和さるべきにあらずとのとを方士マジックが彼等に斷言したりければなり。この何人は又祖先の精靈を尊敬するに規律整然たる犠牲を供養したりき。トールバと云へる一種族は、西比利亞より中央亞細亞に移住したる民なるが、我祖先の墓所

は、高き垣を以て防禦せられつ、是れ死者が其墓中より垣を攀ぢ上りて出づるとを防ぎ、又生ける人が其中に登り入ることを障へんとするにあり。此等の墳墓の中にて、或るものは莊麗なる裝飾を施されありて、宛然支那に於て目撃するが如く、死者の精靈が實際に禮拜せられし所は、遂に寺院となるに至れり。然れども斯の如く墳墓が飾られ、遂に寺院となることは、徐々に變遷して實行せられたるものとす、即ち始めには墓所に花卉を供へ、斯くて崩御せる皇帝の精靈を最高精靈即ち上帝若くは天と等同のものとして崇拜し、且つあらゆる他の精靈即ち神を超越して一層神聖なる階級を此皇帝の精靈が有するものとして深く之を尊崇するに至れるなりけり。

一見すれば支那の緻密なる儀式と、フィンランド人及びラップ人の禮拜とは甚だ異なるものあるに似たり、然れども能ふ限り此兩者の起原に遡りて之を研究すれば、彼等が宗教的信仰の最初の状態は、不思議にもいと酷肖せるを認めせずんばあらず。先づ初めに、何等の教育だになき人にも、知ることを得たりし其最高感念の記號として天を禮拜することは、その禮拜者の思想を益々擴張

せしめ、禮拜者の精神をば歩一步高く向上せしめ、遂に一切の水平線を超越して存在せる信仰即ち絶対無限の信念に到着したるものとす。次に類似せる點は、精靈の死せざること、又自然力の滅せざること、を信するにあり、此信仰は人間の宗教的本能の最も直接にして、且つ日々起生する所の需要を供給し、古代詩歌に高尚なる題目を供へ、猶ほ人間の想像力を満足せしむるものたり。最後に類似せる所は、祖先の精靈が消滅せずして存在することを信仰するにあり。此信仰は假令之を自覺するにもせよ、將た然らざるにもせよ、或は精神的形式に於て、或は物質的形式に於て、總べての宗教の源泉たる靈魂不滅の信仰を包含す。

## 此章の結果

今や簡単に此章の結果を摘叙すれば正に下の如し。  
先づ初めに吾人の發見することは、宗教と國語との間に自ら密接なる關係を有せるが故に國語の分類は又従つて古代宗教の分類に適用せらるべしと云へること即ち是れ。

次に吾人の發見する所は、嘗てアリヤン族が各種族に分裂せし以前に當りて、共通なるアリヤン族の宗教なるもの存在し、又セミティック族の分裂以前にも嘗

て等しくセミティック宗教存在し、支那族及び其他のチーレーニアン族所屬の諸種族分裂以前にも亦共通なるチーレーニアン族の宗教なるもの存在したりしこと是れなり。實に吾人が嘗て國語に於ける古代の三大中心を發見せりしが如く、今や吾人は、茲に宗教の古代的三大中心を見出しぬ、而して予の信する所によれば、全世界の主要なる諸宗教を科學的に研究すべき真正の歴史的材料は、正に之によりて以て供給せらるべしとなす。

## 第四章

序論的認識の  
精解

予が本講義を開始するや、斯くばかり困難なる企圖に従事するに至りたることを、今にして甚だ遺憾に堪へざるを茲に告白す。若し予が名譽を以て此問題より辭退するを得べかりしならんには、予は喜んで爾かなせしならん。然れども以前既に第三章を連續して講演し、今や僅かに此一章のみを餘せるに中絶するを等しく遺憾に感じ、且つ予が云はんと欲せしより一層能く多くのことを云はんが爲めに、この講義を連續せんとは、心に期する所なれども、果して完全に此第四章を終結し得るや否や、自ら痛く不安に感ずる所にして私かに遺憾とする所なり。予の開講を世に發表せし以來所謂予の宗教學緒論たる本講義に於て、或る序論的疑問を逸脱して夫れ以上に高尚なる問題を研究せんとは敢てせざりしとを、諸君は必ず夙に丁知せられしならん。予は此講義に於て、宗教の真正なる科學的研究は、如何なる意味にて可能なりやと云へることを示し、且つ世界の重要なる宗教の信用を置くべき知識を了得せしむるは果して如何なる材料な

りや、將た如何なる原則に準憑して此等の宗教は分類せらるべきなるかてふとを明にせんと欲するにありき。若し夫れ吾人にして過去の破碎せる偶像を研究し、而して出來得べくんば、古代の信仰、並に禮拜の組織中に現はれたる基礎的思想の或る部分を發見すべく、直前古代の寺院に突入して以て此等諸問題を攻蹙したらんには、恐らくは本講義の研究よりも一層の意味を或人々は感ぜらるゝなるべし。然りと雖も、其石たると思ふるとに論なく、苟くも古代の殘趾遺物を獲益有用に研究せんと欲す、須らく先づ此等の遺物殘趾を如何にして眺め、又如何に之を求むべきかを知り置く必要なりとす。古代宗教史に關する著述中に於ては、心寂しき孤獨の遊歴者の如く、吾人は其曠漠たる原野に行吟せざるべからず、是れ恰かも東西兩洋に於ける美術作品の精華たる古代並に近代の肖像、其他美術の原始的製作物及び其副寫等を蒐集せる廣大なる博物館に於て之を眺むる人々の目を眩ずると異なるなけん。斯くて又吾人が、夫等の廣大なる古代宗教の歴史に關する書籍を涉獵せんも、要唯だ漠然たるに畢るとの、如何に神勞し、氣疲れ、膽落ちるの極みならざるべき。語を換へて之を云へば、吾人はそ



が材料の多數を目撃したり、而も其得る所は疑もなく僅少のものに止る。されば吾人が此等の迷路に進入するに先き立ち其見聞し通過せんと欲する事柄につき豫め自家の決心をなすに數時間を費すこそ尤も得策なりとすべし。而して若し夫れ此等の序論的講義に於て、以上述べたる諸點に關し明確なる見解を了するを得ば、諸子は爾後其研究を積み行くに従ひ、本書を閱讀する爲めに消費せられたる時間の、決して無益ならざりしことを會得すべきなり。

比較宗教學と區別せんが爲めに、理論神學の領域範圍に入るに先き立ちて、予が充分慎重の態度を執りたりしとは、諸子の等しく是認する所ならん。理論神學一名宗教哲學は、予の判斷するが如くは、比較宗教學の始めに考究せらるべきものならずして、その終りに研鑽せらるべきものなり。比較宗教學の研究は、其理論神學に關して、恰かも比較言語學の研究が所謂言語哲學なるものを産出しけると同一なる變遷をなすべきなりて、予自身の自信に就き、何等の忌憚だもなぐ之を告白したりき。國語の性質、起原、發達、及び自然的變遷と避くべからざる衰滅とに關するあらゆる研究が、何故比較的方法を以て國語の歴史に貢獻せら

比較宗教學と  
理論神學即宗  
教哲學との前

たる新曙光に基き、そが極初より更に新規に研鑽せられざるべからざるかを知らざるべからず。予は宗教の性質、起原、發達等に關する哲學的研究に就きても亦之と等同の結果となるべきを信ぜんとす。蓋し這般の問題に關する爾前の研究は、すべて比較研究の爲めに無用に歸するものなりて、予意にあらず。プラトリーの「クラテイルス」、ハルリスの「ヘルメス」、ホルンツークスの「ディバルシオン」、オブ、パーレー等は、グリム、ポップ、フンボルト及びブンゼン等の比較研究によれるの結果、全然無用に歸せしものにあらざるなり。さりながら宗教の起原並に信仰の心理的狀態を攻擧する所の所謂哲學者なるものは、將來一層の慎重を以て所論を發表するなるべく、現今まで宗教哲學に關する有名なる研究をなしたりし人々（ヘーゲル及びシエーリング等の哲學者も此中に漏れず）が、彼の獨斷的斷定を敢てせしが如き失態を再演せざるべく、要するに將來の宗教哲學者は、そが詳細なる注意と非獨斷的研究方法とにより自家の所見を唱出するならんと信ず。地質學の起らざりし以前には、地球の起原を研究すること頗ぶる容易なりき。又博言學の起る前には、國語の天啓的起原、摸倣的起原、發音的起原若くは便

宜的起原に關する諸種の學說容易に主張せられ護辯せられたりしなり。然れども以前にこそ學說なり定理なりと稱せられもしたれ、今や事實を旨として論じ、且つ地球の零落又は國語の變遷に關して最も注意周到に考覈したる人々は、夫等の最初の起原に關する大問題に接近することを痛く嫌忌するが故に以前の科學的研究方法とは、氷炭相容れざるに至りぬ。

この序論的講義に於て、何故に爾かく狹隘なる範圍に研究事項を制限したりしかの理由は、以上の辨明にて盡し得たりと信ず。今や本書の終局にも接近したるを以て、出來得る限り此時間を利用し、予が嘗てこれまで説明したることなき問題に關し、吾人が古代の宗教を研究し解釋するに際して當に心得べき正心を以て熱心に研究するあらんとす。

若し夫れ我判官の前に、極惡無道の犯罪人を連れ來らんか、裁判官は彼を取扱ふにだも、決して彼の過半の歴史家、神學者等が世界の宗教を取扱ふが如き舉動に出でざるべし。蓋し此等の歴史家及び神學者は、世界各宗教の祖師が爲したる生涯の事柄を一點の假借なく捕捉し來りて之を判決し、其生涯の行爲が件の

結上起下

比較は公平を要す

祖師の人間としての資格に於て爲されたりしものたるを願省せざるのみか、そが教義の周綴注意を以て辯護せられざりしものを剝奪し來りて之を註釋するに該教義に含蓄せる最惡なるもの、意味を以てし其神に奉仕する儀式が、わが儀式と一致せざる總べての禮拜の舉動を抜抄し來りて之を侮蔑し嘲笑して餘す所なかりき。實に此等の人々は偶爾にして斯かる輕侮惡意の行爲をなしたりしに非ず、一の定見ある目的により敢てしたりしもの否な去る巧妙なる義務の意味を以て斯かる不當の處置をなしたるなり、詳言すれば原告方にては唯一の天使を是認するに、而も被告方にては天使の外何ものをも否認して一切皆これ天使なりと其被告人をして答辯せしめ、其法律顧問を激勵せしむる底の巧妙なる義務の意味をなせしなりき。此結果は裁判を全く誤らしめ、人類の古代宗教に於ける眞箇性質と其目的とに關し大謬の见解を下さしむるに至り、此誤謬判決の必然の結果として基督教を世界の全宗教より確然區劃し、ワシシユタ、ゾロアスター、佛陀、摩西、馬哈默、孔子及び老子等と遙に隔離して以て、世界史上に耶蘇教の建設者が占むべき位置の殊別なる特長を見出す場合にも亦等しく一の

過失に陥没せり。吾人は嘗てあらゆる他の宗教を不當に蔑視し去りて、獨り耶蘇教をのみ賞讃し、之を推尊して以て其開祖の遂に夢想だも及ばざりしと思はれんばかりの最高地位を占領せしめたりき。吾人は又世界の歴史の神聖なる文脈より此耶蘇教を引離したり。且つ吾人は過去に於て神が豫言者を通じて吾人の祖先に傳達したりし所の種々なる方法及び種々なる場合を忘れ、若くは自儘に之を制限し、猶ほ耶蘇教を認むるに、全世界の希望を充し、好機熟せるの時に來れるものなりとせずして、耶蘇の降世は、此全世界に於ける神聖なる政府とも稱せらるべき所の不斷連鎖に於ける唯一の鎖なりとせり。

其惡結果、豈然るのみにして限らんや、即ち人類の古代宗教に無知なりしが爲めに、其古代の宗教的書籍中に見出さるべきものに比し遙に劣れる、非耶蘇教的教義を採用せる人々すらありて、耶蘇教起世前に於ける地球上の全國民は、一人も神を知らず、絶へて救済の希望なく、天に在す彼等の父を忘れ之を離棄したる浮浪の徒たるに過ぎざりしと云へる説を唱導せる人々もありたり。夫れ全世界の宗教を比較的に研究せることが、若しも總べての耶蘇教徒の心より、此神を

## 宗教家の偏見

認めざるものを異端なりとなす説を驅除するの一結果を生じ、而して世界の全歴史中に於て其創造し給ひし凡百の人物に對し、神は永久に之を愛し、永久に知識し給へるものなりとのことを吾人に了知せしむるものとせば、この比較研究たるや、その効果善良ならずと云ふべからざるなり。

實にや現代は、この比較研究てふ善良なる企圖を敢行するに適せる好箇の時機なりと云ふべし。吾人は古代の詩歌、政治的組織、法律的制度、哲學的系統、並に多くの點に於て吾人のものと大に異なる所の國民の美術品等を正當に判斷さるべき場合に會せり。吾人は心的活動の以上述ぶるが如き總べての範圍に於ける不完全なる起原をすら評價することを得つ。斯くて予は信ぜんとす、即ち吾人は嘗て何處に於ても知ると能はざりし教訓を斯の如くにして古代の歴史より搜索するを得たりと。吾人は埃及パピロン希臘等に於ける古代の寺院を賞讃し、又フィヂアスの肖像の前に立ちて低徊去る能はざる底の感慨を起すことを得るにも拘はらず、唯ミネルバの寺院若くはジュビターの肖像に對する時のみは、その如何なる宗教觀念を有したりしかを了察することを爲さずして、

## 比較學の好時

或は哀憐或は罵詈を以て其處より去り、神々は單に偶像のみと貶し肖像に過ぎずと評し、夫等の禮拜者——ペリクリウス、フィデアス、ソクラテース、プラトール等——を木片及び石塊の拜禮者なりと分類す。パピロン、埃及、希臘、羅馬の宗教は云ふまでもなく不完全にして錯誤充滿し、殊に後代に於て然りと云へる事實を否定するものにあらずと雖も、然れども予は、此等の古代人民が假令不完全なるにもせよ、何等かの宗教を抱持したりきとの事實は、正しく此等の人民を向上せしめ、徐々に吾人に接近せしめたるものにして、其美術的作品、其詩歌、其哲學も亦漸次吾人の夫等と觸接するに至れるものなりてふことを肯定せずんばあらざるなり。彼等の美術も詩歌も將た哲學も、宗教にして缺如したらんには決して成立すまじかりしならん。若しも吾人が專斷なくして觀察し、疲勞するなきの愛と慈善との心を以て常に判斷せざるべからざるが如くに、正當に判斷すれば、麗かなる春空の青天の如く、古代の神話の、暗澹たる雲の背後より現前し來る所の、彼の美にして且つ眞理を含める新世界を目睹して、驚歎の感なからんとするも能はざるなり。

## 宗教の過去と現在

吾人は自由に而も大膽に述ぶるを得、且つ寛大慈仁なることを得べし。されど何時かは大膽に且つ寛大に研究せられざりし時代もありき。眞理特に最高の眞理たる宗教の眞理は、要するに盲目的熱心により、火と劍とによりて征服せらるべきものなりと想像せられたる時代もありたり、當時にありては一切の偶像悉く排斥せられ、其祭壇は破壊せられ、其拜禮者は寸斷せられざるを得ざりき。然るに又劍が此代りとして用ひられざるべからざるの時代來りぬ。この劍を以て宗教を争ふ時代の過ぎ去りたる後に於てすら、其使徒及び殉教者の非常なる熱心を要せし所の企圖と争闘とは絶ゆることなく、而して此時代も今や既に過去に葬られたんぬ、即ち宗教に關する血腥き争闘は痕跡だも止めず、勝利は茲に得られて、今や吾人は其過去にありたること及び未來にあるべからんことを平和靜穩の裡に觀察することを得んとす。

吾人は最早や、パアル又はジュピターに就て懼を抱かず、其危險並に困難は、今や以前と甚だ異なる種類のものとはなりつ。神の存在及び神の天地創造を信じ、神が止むとなき攝理によりて此世界を支配することを信ずる以上、吾人と

眞理を含ませる宗教あることなし

同じく神の形と同様に造られたる彼の幾百萬の人類が、其蒙昧野蠻の時代に於て、彼等の宗教は全然虚妄、彼等の全禮拜は悉く滑稽にして、彼等の全生活は一切嘲弄的なりしとして、神より放擲し去られたりてふことを信する能はざるをや。世界のあらゆる宗教を忠實に且つ公平に研究するときは、以上の事實の誤謬なることを知るを得べく、苟も眞理の分子を包含せざる宗教一も存するなしと云へる事實を了會せらるべし。是れぞ實に聖オーガスティンが感得したりし教訓と同一のものたれ。否、な斯の如き忠實なる宗教の獨立的研究は、更に吾人をして一層多くの事柄を悟らしむべし、即ち此研究は、古代宗教の歴史中に於て、一層明確に、人類の神聖なる教育を吾人に覺知せしむ。

以上述べたる見解は、從來非常に反對せられたるものなり、然りと雖も予は依然この見解を固持するものなり。若しも吾人が全人類の歴史中に於て、神聖なる教訓者の日常の教訓と指導との存しあることを讀まず、又世界の諸宗教中に一の目的なく、増大すべき目的も存在せざらんには、神を否認する不信仰の歴史の書籍を總べて閉鎖し、今日野にありて明日寇に投げ入れらるる所の草と人間の

を同一視するに至らんも保せず。果して然らんには人間は實に雀にだも若かざるものとなり了るべし。如何となれば何れの雀と雖も、神の前に忘れらるることなきを以てなり。

然れども自己の救済を確めんが爲めに、自己等と世界の他のあらゆる國民との間に一大深淵を穿たざるべからずと思考しつゝある人々(此等の宗教と拜火教、佛教又は儒教など)の間に區別を置かんとするなりは、世界の宗教の歴史の註釋が、人類の教訓として、如何に強く彼等が沈黙屈服せざらんと欲するも得べからざる底の大家によりて支持せらるゝかを殆ど知覺すること能はざるべし。予は此見解の健全なる所以を證明せんが爲めに、英國の僧正を煩はし、又此見解の眞理を左證せんが爲めに、獨逸の哲學者を煩はすの要あるを見ず、若しも吾人にして大家の書を要すとせば、乃ち茲に法王、寺院の長老、宣教師等を煩はすことを得ん。何を以て之を云ふ、他なし、此等の人々は、その不動且つ確固たる音聲を以て、予と同様な見解を總べて保持したればなり。

予は以前に於て已に論じたりき、舊約書と新約書とを同時に研究し、之に參考

するに希臘及び羅馬の宗教と其哲學とを以てせんか、耶蘇教の僧侶等は世界の各宗教を一層廣く比較する場合に於て、最も有益なる教訓を得べきなることを。舊約書を攻読して耶蘇教の最も主要なる真理が其中に或部分まで缺損しあることを知らば、耶蘇教の僧侶と雖も、亦何故に人間の墮落と其贖罪との間に、久しく年代を經過したりしか、將た何故に人間は、久しき間暗黒の裡に彷徨せざるべからずして、異教徒が獨り神の指導を受くること能はざりしやとの疑問を驚愕しつゝ發したりしなるべし。次にレオ大法王の之に對する答あり。

曰く、「不信不平の心を以て、恩寵を吾人に神が惠與し給へることに關して批難し、且つ吾人の主たる救濟の父の此世に出現し給へることの遅がりしを、彼の不満を懐ける人々をして、恰も前代紀に於て實行せられたる事柄が、猶ほ未だ過去の時代に切迫しつゝ、あらざりし如くに、自己の悲歎をなすを止めしめよ。夫れ使徒が説教し、豫言者が以前に宣言し又常に信仰せられたりし事柄は、其實行せられ、遂行せられたるの時代、遲きに失するの嫌ありと云ふを得べきぞや。救世主が救世の福音を宣傳し給ふことを躊躇し給ふによりて、上帝の智慧と愛とは、

法王レオの説

吾人を驅りて益々救世主の降臨を願はしめ、吾人の罪過を救濟せられんことを愈々乞はしむるに至らしむるならん。この故に前數世紀間既に種々言葉と奇蹟並に表號とを以て告知せられたりし事柄は、一たび救世主の福音下ると共に些の疑問なく、一毫の不確實なる點なきに會すべし。上帝は人類を祝福せんが爲めに更に新しき忠告を降し、又は遲き哀憐の宣言を示し給ふが如きことあるべけんや、實に上帝は始めより全般の人類に對し一視同仁なる救濟の道を設け給ひしなり、決して人々によりて其救濟の遲速、偏頗等を施し給はざりき」と。これ實に大法王レオの訓示したる所論にぞありける。

更に轉じて彼のイレニウスの所言に聞き、如何にして彼が人類に原始的宗教の必然的に不完全なりしかを説明したりしかを研究せしめよ。彼曰く「母親は其幼兒に完全なる食物を給與すべし、然れども幼兒は猶未だ其食物を受くること能はず、この食物は充分成長したる大人に適當せるものなるを以てなり。上帝も亦此比喻と等しく、最初より人類に其完全なる状態に於て真理を供與し給ふことを得られしならんと雖も、人類は能く此完全なる真理を上帝より受く

イレニウスの説

ること能はざりき、人類は猶未だ發達せずして、乃ち幼稚の状態にありたればなり」と。

保羅の語

此イレニウスの所説も亦前者と同じく、上帝の助言、救済に關する假定的解釋なりと云はば予は今更に最後の所證として、聖パウロ及び聖ペテロの説を參考にまで茲に列擧するを得ん。使徒パウロ述べて曰く、『法律は猶太人にとりて其教師なり』。又使徒ペテロ曰く、『神の人間を視給へるや、決して偏頗なるものにあらず、苟くも上帝を畏れ、正義の行をなす國民は、その何れの國民たるを問はず、皆共に上帝の恩恵を蒙るを得べきなり』と。

公平なる者は引証を要せず

如上の例證之を參考として列擧せんか其數實に乏しとせず、然りと雖も已に前にも論じ置きたりしが如く、世界の古代宗教に係る記録を閱讀するに、公平なる考査及び恩惠的精神、換言すれば憎惡の念を挾むことなくして、其如何なる場所に於て發見せらるゝものたるを選ばず、苟くも眞理は即ち眞理なりとして賞讃するの精神を有する時には、吾人は必ずしも前に掲げたりしが如き所謂大家の所論を引証するの要なきなり。

邪惡世界も善其世界となるべし

予の想像するが如くば、その遲速の差こそあれ、吾人の一生涯中には、大抵一度は必ず吾人の所謂邪惡の世界と稱するものが、一旦その善良なる動機に對して人間に信用を措き、決して嫉妬の念を挾まず、惡心を懷かず、又其隣人に比して自己が善良の人なりと考ふることをせずと定着し得たらんには、恰も魔術によりて變化せられたらん如くに我執頓みに去りて此世界が急に善良なるものと變化せらるるかを感ずることを得べし。人間は正直にして善良なるものなりと信用せよ、設し又人間が斯の如きものにあらずとするも、汝がかく人間に置きし信用は、人間をして正直に且つ善良なるものたらしむるの傾向を呈せしむるに至らん。茲に論ぜし所の主旨は、移して以て世界の各宗教に適用せらるべし。即ち一たび此等の諸宗教中、何ものか正直にして善良なりやにつき研究せんと決心するあらんか、庶幾くば再び我古代の諸宗教を了察するを得ん。若しも此等の諸宗教にして、果して基督教國の多數者が以前より思考し來れりしが如く、惡魔の所作なりとせば、最初より此惡魔的所作自身に反對せる分裂割據的の一王國なるもの存在せざりしなるか。蓋し善を爲すべし惡を退けよと告げさる

宗教世に果してありや、或はなきにあらずとせんも、予は不幸にして未だ斯る宗教を見聞せざるなり。ラツビ、ヒルレル氏が所謂一切宗教の極致とも稱すべきは、簡單なる一句「子供よ善良なれ」と云ふにあり、而して此警戒を包含せざる宗教一として世に存在せざるなり。茲に謂ふ所の「善良なれ小供よ」との警句は、甚だ簡單なる初學問答にも似たりと雖も、而も此警句に加ふるに、「小供よ願くは上帝の爲めに善良なれ」との語を以てする時は、此語たる實に法律及び豫言者の殆んど全部を包括するものなりと云ふを憚らず。

是れ此古代の神聖なる書籍より拾集したる所の拔萃、即ち予にとりては黄金の粒を集め得たるよりも一層貴重なる真理の粒を蒐集したる如上の拔萃を希くは能く讀破せられんことを。一たび梵語又は支那語の奇異なる發音に慣接したらんには、吾人の感歎して措く能はざる底の真理を包含せる其簡單なる祈禱を總べて讀破せんこと難きにあらざるべし。予は今此處に二三の標本を呈出せんかな。

茲に吠陀時代の豫言者ブシニウトハガウルナ(希臘の *Odysses* に當る、即ち虚空

古代宗教書拔萃の價值

吠陀の頌歌

及び空中に住める古代の神の名に向ひ捧げたる祈禱あり。

予は少くとも一の詩歌を原文のまま、諸子の前に讀み上ぐることを得、此詩は「カ荷吠陀」の第七卷第八十六首の頌歌なり。此詩を讀上ぐる時は、諸子は三千年以上の昔、當時シヤタドルと稱せられたる現今のサットレッヂユの邊域に存せる一小村に於て、始めて此頌歌が讀まれし所の其同音調を感ずることを得べし。實に諸子は三千年以上の往時にありて、吾人の感ずる如く感じ、吾人の談ずる如く談じ、吾人の信ずる如く多くの點に於て同様に信仰したりし暗黒色の顔貌を呈せる印度人——牧羊者、詩人、僧侶、貴族——否、なその豫言者の高尚なる軍隊中に於て、かのダビッドと比肩さるべき人によりて、此詩が今現に諸子の聞かると異ならざる音調を以て讀上げられたりしことを感知すべきなり。

蓋し詩的感興によりて伴の印度人が思想界の廣大なる大洋中に始めて起したる所の波動は、數世紀の年所を經由して漸く今や吾人の海濱に到達し、且つ誤解せらるゝなきの調子を以て、そが、全能神の實在を感じけん古代アリヤン詩人の心に起りたりし事柄を吾人に返響せしむるに至るまで其波紋を擴布したり



き。されば若し吾人にして此波動の影響の如何に大なるかを知らば誰か此詩を以て精神の破壊せざる理由を説明するものならずとせんや。實に古代印度詩人は全能の神たる天地の創造者あるを感じ、同時に自己の罪ある事を自覺し、之に祈願するに其罪を救ひ其苦を免れしめ給はんことを以てせり。若し夫れ此吠陀の頌歌の奇異なる音調を聞かんか身は茲にありながら、心は宛然として當時の感興に遊散し、覺えず心臓の躍如たるを感ぜずんばあらず。ヴシエトハは亦正しく吾人の間にもあり、然り而して予を以て彼の解釋者なりとなさば、諸子は果して如何なる事柄を此古代詩人が歌はんとしたりしかてふことを、總べて吾人の理解し得べきものなりと是認するに、吝ならざるべきか。

*Dhritā tv asya mahimā janūnāsi,*

*vi yas tasmābha rodasi cid nrvi.*

*pva nūkam iśvān nūnde bhāntāni,*

*dvitā naksatram paprahāc ca bhūma.*

「廣大なる天地を分離して創造りませし上帝の功業は、偉大にして且つ智慧

に満てるよ。上帝は輝く天を高く上に置き、巨大無限の地をば其下に擴げ、斯くして星多き天と廣大なる土地とを距て、造り給ひつ。

「予は此言を自身の爲めに語りつゝあるか。如何にして吾はヅルナの神に近寄り得べきぞ。ヅルナは吾の祈願を喜んで受納し給ふべきか。平静なる心を以てする其如何なる時にか、吾はヅルナの我罪を宥和し給へる容貌を拜することを得べき。」

「あゝヅルナよ、吾は身の罪を明らめばやとて問ひまいらすなり。世の賢者に尋ねばや。總べての賢者の語るを聞けば、汝に怒りますはヅルナこそ。」

「爾を常に賞讃する其友をば打破せんと擬せらるゝ、是れそも何の故ぞ、あゝヅルナよ、こは抑も罪未だ消えぬが爲めか。爾打勝ち得ざる主よ、願くは告げ給へ、さらば吾忽ちにして罪より免がれ、頌歌奉りつゝ爾の方に向きてぞ行かん。」

「願くは祖先の犯せし罪より我等を救ひませ、願くは此等自らの諸罪をも今

共に救ひ給へ。このヴシシュトハを許し給へ、あゝ王よ、かの盗める牛を食ひし盗人の如く、小牛を縄より免れしめけん前例に準ひて、吾が罪をも許させ給へ。

「犯せし罪は故意になせるものならず、あゝヴルナよ、そは全く吾が過失の致すところぞ。實にや酒に酔ひ、情慾に驅られ、骰子を弄し、思慮なきに出でしものなりき。世に青年を悪しく誘ふ老人少からず、思へば睡眠の時にだも、吾は失行を免る能はざりしよ。

「われをして罪を免れ怒れる神に満足を與へしめよ、寛大なる主人に満足を與ふる彼の奴隸の如くに。救の主たる神は愚者に知見を與へ給ふ、最も智慧に満ち給へる上帝は、爾を崇拜するもの總べてを豊富に誘導し給ふなり。

「あゝ主ヴルナよ、この歌をして願くは爾の御心に満足ならしめ給へ。既に我等の得つらんものを失はず、更に又新たに富み榮へんことを得せしめ給へ。あゝ神々よ、爾の恩恵のもとに絶へず吾等を安からしめ給へ。』  
是れ即ちヴシシュトハの歌ひたりし頌歌の意味を、その原文より譯出したる

ものに係れり。

予は此古代の祈禱の缺點を知る、同時にまた其美點を認めずんばあらざるなり。力荷吠陀中に存する多數頌歌の中に於て、今此處に掲擧したらん如き僅かに一個の詩歌を發見するにすら、若し之に特殊探見の感興を伴ふなくんば其勞や少々ならざるべく、時としては、畢世の勞苦にも價することなしとせず。少くとも三千年以上の昔時に於て、斯の如き詩歌が印度に於て、造られたりと云へる事實だけを確めんにも、これ亦等同多大の感興なくしては、其勞少々なりとせざるをや。斯る詩歌の發見することの至難なる、何人と雖も首肯する所なるべし。此を以て之を觀るに、人間は神によりて決して見捨てられざりしうこと確かなるべく、此確證は又歴史研究家にとりて、パピロン及び埃及の全王朝よりも貴重に、あらゆる沼湖地の村落よりも、亦ネアンデルタール若くはアプベウルの頭臚並に顎骨よりも貴重なるべきや明白のことたり。

予は次に拜火教の聖典ゼンダヴェスタより抜抄せし文句を列擧せん。この文句はアウラマズダ即ちゼンド語のアフローマズダーオの恩寵を受けて王位に

即ち、此神の神聖なる肖像を高さベヒストンの山に安置したりし所の彼の波斯の古代の王たるサイラス、ダライアス、ゼルクセスの楔形文字の碑文よりも更に舊古の文字を使用せり。此古書又は少くとも其斷片は、爾後幾多の王朝及び幾多の王國を通じて在留したりき。而して此等の斷片は、今尙ほ孟買に在留せる波斯族の遺民によりて其面影を見るべく、此遺民はパーシーなる名稱を以て全世界に普ねく知らる。

これより拔萃せんとする第一のものは、實にヤシュナの第三十章より抄録したるものとす。此歌は已に翻譯せられつ、否な適切に之を云へば、之を讀み且つ解さんとして多數の學者により試みられたるなりき。就中スビーゲル博士並にハウグ博士の如きそが録々の人物たり。尙ほ此歌はブンセン氏の「歴史中の神」と名くる書籍中にも參照せられぬ(ウインクウオース女史の譯出せる該書第一卷二百七十七頁)されば予は此有名なる頌歌の生々たる光景を存する所の文句を該書より引用すべきなり。

ブンセン氏曰く「中央亞細亞に存する古代の驚愕の市府即ちバクトラの近傍

にある火を禮拜する爲めに設けられたりし神聖なる丘陵の一を今茲に述べしめよ、其バクトラなる地名は、光榮ある」と云へる意味の語にして、今はバルク即ち「諸市府の母」と稱せらるゝもの是れなり。此丘陵の高さに昇りて、試みに海面を抜く殆んど二千呎以上に聳々たる高地を瞰下すと假定せんか、此高地は北方に向ふて漸次低下し、遂に沙漠となりて終る、故を以てバクトルス河は、此沙漠に妨げられ近傍のオクスス河に達する能はざるなり。又瞳を轉じて南方地平線を瞰下すれば、ヒンドークツシユ山脈の最後の山嶺は、峻として五千呎の高峯を擡げつゝあるを見るならん。蓋し此山脈は、アレキサンダーの歴史家が呼んで印度高架索と稱するもの然り。此等の丘陵パロパミスス又はヒンドークツシユの高原より、バクトルス即ちデハス河の主たる河流沿々として其源を支出し、バクトラ市府の附近に至りて數百の小河に分れ、斯くして此國の表面一帯を土地豊饒の樂園たらしむるなり。斯くの如き河流縱横に貫通せる市府に群をなしつつ、集中し來るなる彼の行商駱駝隊は、山又山を越へて驚愕の土地に到達し、此所よりして種々の貴重なる物品を携へ歸るなり。火を焚きて靜かに犠牲を神

に供へ、火炎の昇る光景に見て諸種の事態を卜知したりし所の祭典が、此市府に於て施行せらるゝに當りてや、ザラドストラは其國の貴族を此市府に集會せしめ、盛大なる宗教的儀式を擧ぐるを例とせり。彼は其引率する弟子の豫言者、説教者の頭領として茲に到達し、而して此等の貴族を其身邊に圍繞周匝せしめ、それが信仰と迷信とを選択せしむるなり」と。

予は此頌歌を一部スビーゲル氏に一部又ハツグ氏に倣ふて茲に之を譯せんとするに當り、ヒュブツシユマン博士によりて提供せられたりし或る重要なる修正をも之を利用するに怠らざりき。然りと雖も此多數の章句中、我翻譯が全く試験的なること、並に茲に示す所は、要するに此頌歌の梗概即ち一般の意味たるに止まることを豫め自白し置くべし。

一、今茲に予の祈禱を聞かんとて集り來れる人々に要求す、全知の救世主を讚美せんが爲めに、ゾオフマン(善良なる精神)の頌歌を歌はんことを。賢明なるアシャよ、予は爾の恩恵が天の光明の中に顯出し來らんことを希ふ。

二、汝の耳をもて最良の事を聞け、汝の心をもて純然たるものを認めよ、これ

によつて各人は、大なる運命落滅の運命の來る前に、自家の爲めに自己の執るべき主義を撰擇せよ。賢明なるものよ、願くは吾等の側に居ませ。

三、双見なる所の古き精靈は、思想、言語及び行爲の中に於て、何ものか善にして何ものか悪なるやを我等に知らしむ。夫れ善なるものは惡をなさず、而して此二者中、善なる精靈は殊に顯著なるものなり。

四、この二個の精靈相隨伴して來りし時に、始めて生命と死滅とを作りたりき、茲に於てか惡行を敢てせる人々に對しては、最も惡しき生命を與へ、善良なる行爲をなせしものには、幸福なる生命を賦與することとなりぬ。

五、この二個の精靈中にて、惡なる方は最も惡しき行爲を撰び、親切なる精靈は正しきことを擇ぶ。この精靈は實に不變不易の天空をもて其衣服となし、又實に善良なる行爲をもて、忠實にアフラマズダを歡喜せしむるなり。

六、提婆(諸天)を尊信して欺かれたる人々は、正しく此兩者の精靈を區別すること能はず、最も惡しき精靈を撰べる人々は、會議の爲めに集まりて、アエシユマの許に來りて、人間の生命を惱まさんとするものなり。

七、善良なる精靈の許に来るものは、恐らくは智慧の徳をもて繞集せん。絶へざる所のアルマイテ、彼女自身は、その身體を強くなせり。彼女の賜物によりて富めることを上帝に感謝す。

八、然るに彼等の罪惡の罰の來る時や、あゝマダズよ、爾の力は眞理の手に虚偽を渡せし人々に對し、信心の果報として知られなん。

九、さらば我等をして此世界を進め助くる人々たらしめよ、あゝアフラマズダ、あゝ幸福を授けますなるアシャよ、我等の心をして常に智慧の住する處に安止せしめよ。

十、然らば有毒なるドルヂユの墮落の時は來りなん。さはれゾオフマノマズダ及びアシャの美しき住處に、永久よき名聲を得んとする人々は繞集せらるべし。

十一、人々よ、若しも汝等がマズダの與へたる此等の命令に服従するならんか、然らば則ち人間の間には、期して勝利の時來るべし。この命令とは他なし、惡人には苦痛を與へ、正直なるものには幸福を與へんと云へるものは是れのみ。

次に掲ぐる所の三種の詩歌は、ヤシユナの第四十三章より抜抄せられたるものなり。

『あゝアフラよ、願くは吾に眞理を告げ給へ。果して何人が世界の初めより此世界の父たりしぞ。誰か果して太陽と星とを作りませしや。月をして満ち、又缺けしむるものは誰ぞ。あゝマズダよ、予は此等の疑問と之に類せる他の種々なる問題を一切知らんと欲す。

『あゝアフラの神よ、吾は希ひ奉る、願くは吾に眞理を告げませ。地を與へ、且つ雲の地上に落下し來らぬやう高く支ふるものは果して誰ぞや。何人か海と樹とを支持する。何人か風と雲とに迅速なる力を與へし、何人か善良なる精靈の創造者なるぞ。

『あゝアフラよ、希ふらくは吾に眞理を告げ給へ。かの親切なる光明と暗黒とを作り、又親切なる睡眠と覺醒とを與へられしは誰ぞ。誰か朝と晝及び夜を作り、且つ自己の義務を盡すことの賢明なる所以を自認せしむるに至らしめしや。』

ゼンダヴェスマの文句を正確に解讀し能はざるばかり至難なる事項茲に存在すと雖も、ゾロアスターの經典中に於て、何人も絶へず實行せられつゝある善と惡との争闘に干與し、且つ善は遂に最後の勝利を占むることを確むるものなりとの意味を保有するの一事に至りては瞭として火を賭るが如けん

佛陀の金言

法句經

佛陀の金言と其比喩とは、今猶ほ多數存在して其撰擇に迷ふ程なり、されば予は茲に何れの金言を撰び、何れの比喩を取りて可なるべきか。パトリ語にて記されたる佛陀の金言集中に曰く、

一、吾等が斯の如き現狀に居在する所以のものは、是れ實に過去に於て種々憶念したる結果のみ、我等の現狀は是れ我等の思想に基き、我等の思想より作られたるものなり。若し人、惡念を以て説話し又敢行せば、其結果として苦痛來ること、恰も車引ける人の足に、車輪の附隨するが如く直下に報ひらるべし。四九蜂の蜜を集め、而も花を害することなくして其花を去るが如く、聖者をして此世に安住せしめん。

六二、此等の兒童は予が子なり、此富は予が所有なりと云へる執着心の爲に、

愚者は絶へず我心を苦惱しつゝあるなり。此兒童の親たる人の自身すら其人の自身に屬するものにあらず、何に況んや其子及び財寶をや、

百二十一、惡や必ず吾身邊に來らざるべしと云ひつゝ、輕々しく惡事を考量すべからず。又善は吾を惠まざるべしと云ひつゝ、輕々に善事を考量せざれ。滴々の水によりてだに、水瓶は遂に充溢せらるゝにあらずや。

百七十三、惡しき行爲が善良なる行爲によりて蔽はるゝ人は、此の世間を輝かすこと、恰も雲間より洩れ出づる月の、この下界を照らすに等しかるべし。

二百二十三、忿怒に打勝つに慈悲を以てし、惡に打勝つに善を以てし、貪慾に打勝つに寛大を以てし、虛妄に打勝つに眞實を以てせよ。

二百六十四、剃髮して修養を積まざる人は、未だ以て聖者たること能はず、猶且つ慾望と貪慾とに捕へらるゝの人、何爲れぞ能く聖者たることを得べけんや。

三百九十四、ちゝ凡夫よ、組合したる毛の効用や如何に。山羊の皮の衣服の効用果して如何ぞや、汝の内部には暴掠充ち、而して外部には清潔を裝ふ。

佛敎と耶蘇敎の兩極點

佛敎ばかり絶へず自己の事を顧省する所の宗敎、殆ど他に比類なげん、然れども佛敎に於けるが如く、吾人が遠く眞理より距離を置かれたる宗敎亦他に比類なかるべし。佛敎と耶蘇敎とは、實に宗敎の最も必要なる點に關し二個の反對せる兩極をなせるものなり。前者は一の高尙なる勢力に依頼する底のあらゆる感情を忘れ、従つて一の最高なる上帝の存在を否認し、後者は全然吾等の父として神に信頼し、神の子として人の子を信仰し、斯くして吾人は皆總べて神の子なりと認む。然れども佛陀及び其弟子の言語と耶蘇並に其弟子の言語との間には、奇異なる適應一致の存しあるを見るべし。佛敎の傳説及び其比喩は耶蘇紀元前已に存在したるもの多しと雖も、此等のことが餘りに耶蘇敎の夫れに類似せるが爲めに、恰かも新約全書より採取したらんかの如き觀あるなり。

阿難陀と摩訶伽女

佛陀の子弟阿難陀が、其國を永く旅行しけるの後、或日マータンギーと稱する旃陀羅の低階級に屬せる婦人と井戸の附近にて出遇ひ、水を與へられんことを乞へり。時に此女は告ぐるに己の身分を以てし、且つ阿難陀の側近く寄ること能はざるを以てせり。然れども阿難陀は答へぬ、己が姉妹よ、吾は汝の階級若く

佛經に比喩多し

は家族の何たるかを尋ぬるものにあらず、只一杯の水を與へられんことを願へるのみと。彼の女は、その後遂に佛陀の弟子となるに至れり。時としては新約全書中に於て、命令の簡單なる形式を以て述べらるゝ教義が、又佛敎の中に比喩の形式を以て諄々として教へ込まることあり。

予嘗て或る佛典を閱せしに、次の如き物語あり、即ち佛敎僧侶が自己の周圍に群集せる所の人々に説教しつゝありたりき。此群集中に一人の王あり、此王の心は、我血屬を繼嗣せしむべき子孫なかりし爲め、甚だ悲歎に沈湎しつゝありたり。時に説教者は述べて曰く、

『我等の財寶を捨棄することは、此世に於て最も困難なる徳行なりと思考せらる。自己の財寶を棄捨する人は、其生命を棄捨するに等し、所以如何となれば、我等の生命は我等の財寶に依頼し、其財寶に倚依するものなるが故なり。然りと雖も一たび仁慈の心に動かさるゝや、佛陀は恰かも草を捨つるが如く、他人の爲めに自己の生命を棄捨し給へり、ざるを何故に我等は不幸なる財寶のことを苦心し、煩悶すべき理由ありや。斯の如き高尙なる徳行によりて佛

陀は一切の慾望より解脱し、神聖なる智慧を了得したりし時に、遂に佛の正覺位に昇り給へるなりき。されば苟も智あるものは、自己の快樂的慾望を脱却して後に、よろしく全般の人々に善行をなせよ、自己の真正なる智慧を護得せんが爲めには、その生命をも犠牲に供すべし。

吾が説く所に諦聽せよ。昔時あらゆる世界の慾望を脱離したる王子ありき。此王子年若く美しかりしも其王宮を見捨て、諸國巡遊の隱者たらんとの願望を起したり。此隱者或る日商人の家に來りけると、商人の年若き妻と面接したりしが、隱士の目の愛らしきを見て、妻は心私かに動き、乃ち叫んで曰く、御身の如き美しき身の、如何なれば斯くは心苦しき隱者修業の生涯を思ひ立ち給ひしぞ、實にや御身が其優しき目を以て或る婦人を眺めまざば、その婦人は、幸福なりと。

斯る言を聞きし時に、隱者は己れの一方の目を引抜き、その手の上に乗せ且つ謂つて曰く、願くは此目を見よ、此目の恐ろしき球を若し御身が欲せらるゝならば乞ふ速かに之を取れ、他の目も亦共に欲せらるゝならば則ち與ふべし。

やよ見ませ、一眼又は兩眼を失ひたる時は、果して目に美醜の區別あらんや、目に愛らしきと否とあらんや、而も御身は尙ほ我目に愛らしき所ありと思はゞ、幸に告げよ、と。

説教者は猶ほ同様なる口調を以て靜かに其話を續けぬ、即ち説教者は同一目的の爲めに、其他種々なる比喩を引用し、滔々として辯じ去り論じ來りて、最後に告ぐるに、真正なる聖者は自己の財産、又は生命などを顧慮するものにあらず、並に妻子眷屬等の如き其分離し易く消滅し易きこと籠の中に投げ入れらるゝ草にも似たるものなれば、決して此等に執着愛惜すべきにあらざることを以てせり。

上來述べたるが如き此等の比喩を一讀せんには、聖書の章句を記憶せては叶はざるべし。即ち一例を舉げんか、馬太傳に曰く、若し右の目汝を罪に陥さば、拔出して之を棄て、五章二十九節、家、兄弟姉妹、父母妻子を捨てたるもの云々、十九章二十一節、又路加傳に曰く、今日野にありて明日爐に投げ入らるゝ草云々、十二章二十八節と、これ等の聖書の章句を記憶するにあらずんば、決して印度佛教の比



佛敎話集中の物語

喩の眞意を了解さるべくもあらず。諸人の話河を集合したる大海と題せられたりし商人の物語あるを見ん。然れども此商人の年若き子は、其父を厭ひ之を呼ぶに犯罪人を以てしたりき。

「父なる商人の曰く、何故汝は予を罵るぞ」

時に其の子は答へて曰く、御身は吠陀の法律を顧みずして、法律ならざる一の新法律に従ひ給へり。婆羅門を見捨て、沙門を尊崇し給へり。世の下劣なる稟生の人々によりてのみ信仰せらるゝ善逝の宗教の効果夫れ果して如何。身に纏へる腰の衣服を脱ぎ捨て、頭髮を剃除したる時に幸福となるべき僧侶とは、果して何人かならんと欲するぞ、又己の欲するものを食ひ滅罪的苦行と、洗身の修業とを積まぬ僧侶には、誰か果してならんとは欲すべき」

父は答へぬ、宗教には種々なる形式あり、或る宗教は人間界を離れたる他の世界を眺めつゝ之を研究し、或る宗教は又主として此人間の爲めに立てられたる

ものあり。然れども眞正なる婆羅門教も亦情慾を制し、眞理を愛し、一切の生物に親切なること、及び猥りに階級の規矩を破却せざるに等によりて組織せらる。故に汝は一切の生物を保護すべき予の宗教を罵詈雑言すること勿れ。如何となれば親切なることは確かに非法律的ならずして、其親切なるものはあらゆる生物に保護を與ふること以外に存するものならずと思考するを以てなり。されば其主たる目的は慈悲にあり、其最後の目的及び救済に存せる予の宗教に自ら爾かく甚だしく耽着したればとて、將た何の罪惡あらんやと。

然れども此父の意見を容れずして子は猶ほ罵詈雑言を絶たざりしかば、父は王の前に其子を引き連れ、王は之を處刑すべく命令を下し、其子に二ヶ月の間に來るべき死に對する準備をなせよと命じ給ひぬ。二ヶ月の終りに其子は再び王の前に連れ來られたり、王は其子の顔色蒼白を呈していと憔悴せる態を見、其理由を諒ひ給へり。乃ち刻々に死の運命の近寄り來るが爲め、食物も咽喉に下らず、日々憂愁に苦みたりしに由る旨を答へつ。時に王は告げたまはく、朕は汝に死の近づく場合に生物が感ずる所の苦痛の何たるかを知らしめ、且つ一切の生物

に同情せよと勸むる宗教の尊崇すべきことを覺らしめんが爲めに、爾かく處刑せんと脅したるなりきと。死の恐ろしきことを覺知せしものから、其子は今や精神的自由を得んと努力し、再び決して其父の宗教を罵詈すべくもあらずなりにき。

此子は甚く王の語に感動し、如何にせば精神の自由を得らるべきやを王に尋ねたり。茲に於てか王は、市府に市場の存するを聞けるを以て、此青年に命ずるに、汝は油を満たせる器を持ち、一滴をも洩すことなくして、此市府の道路を歩し行くべしと。拔劍せる二名の處刑官は、その青年の後に隨ひ、若し一滴にても洩したらんには、直ちに此青年の首を切り落すべき筈なりき。青年が此市府の全路を歩行し了りたる後、一滴だも洩すことなく、王の方に向ひぬ、王曰く、汝は今日道路を歩行中、何人を見たるやと。

青年は答へて曰く、予の思考は絶へず此器の上であり、されば他に何ものをも見ず、又聞かざりきと。時に王は又謂つて曰く、汝の思想をして、これと同じく、常に最高なるものの上

に安住せしめよ。常に心を一處に集中し、他の外界の生活のことを顧念せざるに至れば、その人は眞理を見ることを得ん、而して眞理を發見し得たるの後は、更に現世の苦網によりて縛せられざるに至るべし。是れ實に汝を精神的自由の境に導致すべき方法を、數語にて汝に教訓する所なりと。

佛陀の教によれば、吾人の一切行爲の動機は、その隣人を憐み、又愛するに存す。佛教に於ても將た儒教に於ても、わが耶穌教中に最も價値ある點を發見することを得べし。予は茲に孔夫子の語を引用して其證となさん。次なる語即ち是れなり。

「人の己れに之を爲したる時に、己れの欲せざる所のことは、之を又他人に施すこと勿れ」

支那に於ける第二の宗教の建設者たる老子より引證したる語に曰く、

「天地開闢の以前に存在したりし無限のものあり。

「その靜、その自由、實に言語に絶す。

「このものは生存絶對にして而も何等の變化なし。

孔子の語

老子の語

希臘羅馬の宗教と道徳に關する高尙なる議論

「このものは諸方面に運動すれども決して苦まず。  
 『吾人は此ものを宇宙の母として尊敬す。  
 『予は實に其名づくべきを知らざるなり。  
 『予は此ものに名づくるに道<sup>ミチ</sup>を以てせん。  
 『これに名づけんとしたりし時に、予は之を稱して大なりと云へり。  
 『これを大なりと呼びたる後に、予は之を不定なるものとせり。  
 『之を不定なるものとなせる後に、予は之を離れたるものとなせり。  
 『これを離れたるものとなしたる後に、予は此ものが自己に歸り來るものなりと云ふ。』

夫れ希臘羅馬の神話に拘らず、又その偶像禮拜のありたるに關せず、希臘又は羅馬の文學は、宗教と道徳とに關し最も高尙なる議論に富めることを一言するの必要ありと信ず。プラト<sup>Plato</sup>ンが神と等しからんが爲めに、人間は努力せずんばあらずと云へるの故を以て、彼はデユピタ<sup>Demipota</sup>、マイルス<sup>Miles</sup>若くはメルキュリ<sup>Mercure</sup>等を念頭に置きたりと思考さるべきや。又他の詩人が、良心は總べての人々にとり

亞弗利加人の神を願ふ念慮

て神なりと叫びたりし故を以て、此詩人は果して真正なる神の知識より遙かに隔離しつゝありたりとなすか。

吾人が恐らくは不完全ならんと豫期する亞弗利加蠻人中に於てすら、その神を願ふ念慮の盛に起りつゝあることを、半ば小供らしく、半ば小兒に似たる言葉を以て示されたるものを發見することを得べし。ツール<sup>Tull</sup>人の信用を得たるカラウエイ博士が、之と問答せる一節に曰く、

「我等は最初吾等の上に在ます王のことにつき、白人より何事をも聞きしことなし。夏期雷鳴の來るや吾等は、王が遊戯せられつゝありと云ふを常とす。而して若し此雷を恐るゝものあれば、年長者は其者に告げて曰ふ、そは畢竟恐怖の外何ものもあらざらん。汝は王に屬せる如何なるものかを盗み食ひたりしぞと。」

又他の老人は曰く、吾等の幼年の頃嘗て云ひ傳へられたるあり、王は天に在すと。この言葉は吾等が小兒なりし時、絶へず聞く所なりき。彼等は常に高き處に王在すと云ひつゝ、高處を指せり、吾等は王の名を畏れず、王は高く天に

在すと云へることのみ聞き。世界の創造者は上に在す王なりと世人の云ひ傳ふることを聞きにき。

いと年老ひたる一婦人が、その國の一人に試問せられけるの時に、答へて云ひけらく、何處より此穀物は來りしやと穀物の起源に就て我等が尋ねたりしに、そは萬物を作り給ひし創造者により作られたるものなれども、吾人は其創造者の何ものなるやを知らずと老人連は答へぬ、乃ち吾等は重ねて尋ねたり、わが首長と仰ぐべき人々を我等今現に之を見ることを得、さらば創造者は何處に在すかと、然るに老人達は、吾等の仰ぐ此等の首長も亦創造者の作る所なりと答へつゝ否定しつ。且つ吾等が何處にも創造者を見ること能はざるを以て、何處に創造者は在すにやと尋ねし時に、萬物の創造者は天にあり、天にも亦國民多く國家をなせりと、吾等の父が天の方を指しつゝ答ふるを聞けり。創造者は諸王の中の王なりと通常云ひ傳ふ、落雷したる時に、天が其雷の落ちたる村にて家畜を殺したりと云ひ傳へらるゝことを聞きしかば、吾等は云ひ合しぬ、上帝は其雷の落ちたる村より家畜を取去り給へりと。又雷鳴のある

に當りては、これ上帝の遊戯せられつゝあるなりと稱して、人々は自ら慰め、勇氣を鼓舞しつゝあるなり。

更に一例を擧げんに、アマンタンデヤ族なる四ツの傷を負へる一老人が、同族なるウチャカの敵の爲めに敗北しけるの時に云へるやう、吾等の祖先の信仰は次の如し、即ち祖先の曰く、人間たる否な地球の人間たる所のウンクルンテルありと、且つ常に稱せり、天に王ありと。若し夫れ殺たばしり雷鳴するあらんか、これ上帝が武裝しつゝありて殺を下し給ふにやあらん、王は之によりて萬事を整頓し給ふにぞあるべきと云ひたり。生物の起源に就ては、唯夫れ天上にあることを知るのみ。古代の人々の言に曰く、生物の起源は上にあり、是れ實に生命を人間に與ふるの起源なりと。雨は天上の王より降り來り、太陽また此王より生れ、かの夜間暗黒を照破して人々の歩行に些の危険なからんやう輝く所の月も亦この王より生れ出てたりと、最初は云ひ傳へられしなり。

若し電光ありて家畜を打殺したるの時、之れが爲めに人民は決して苦痛を

感ぜざりき。乃ち王は自らの食料として家畜を屠殺せられぬ、その食料は汝のものか、將た王のものなりや、王は饑ゑ給へり、故に自ら其食料にとて斯くは家畜を殺されけるなり」と、通常の人々は云ひ傳へたり。又或村に落雷して牝牛を打殺したる時の如きは、此村は將來盛大ならん」と。若し又人間の電光に打たれて死せんか、王は人間を罰し給ひたり」と云ひはやされたりき。

創造者の名を又イトンゴとも云ひ、そは精靈の意味なり。次に擧ぐる所の一話は、土人の云ひ傳ふるものに係れり、曰く、土人がイトンゴと云ふ時には、死して再び生くるが如き人間のことを云へるにあらず、人間と家畜とを支持する所の地球を、高く支ふるものなりとの意味なり。こゝに所謂「高く支ふる者」とは、吾人の生活せんとする此地球を指して云へるなり。詳言すれば、吾人は夫れによりて生活し、夫れなくしては生存すること能はず、又夫れによりて吾人の現存しつゝある所の地球を「高く支ふる者あるなり」と。

夫れ宗教的生活を缺き、又何等神聖なる勢力の觀念を有せざる者なりと見做さるゝ人民の中に於てだに、吾人は其宗教の最必要素の或部分が、充分發達せら

れあることを知るべし。即ち此等の人民の中に於ても亦目に見えざる神を信じ、天に住して雨、霰、雷、等を送り、以て悪人を懲らしめ、無數の丘陵の上に住へる家畜の群より、自己の犠牲を請求する所の、所謂萬物の創造者なるものを信仰す。爾かく智能の充分に發達せざる人民の間に於てすら、宗教的萌芽は存在するを以て、吾人の宗教に關する消極的證據を純粹に採用し、野蠻種族中に一切宗教の缺如しあることを是認せんとす、必ずや先づ之に先立ちて充分の注意を此點に拂はずんばあるべからざる所以を了せん。今假りに印度人若くは支那に生れるる教育ある土人が、急に亞弗利加の黒奴の住せる國に現はれ、幸うじて解せらるべき英語を以て、塵埃に汚れたる石炭積人足に數種の疑問を呈出し、之に問ふに其祖先が生物の起源に關して如何なることを告げたりしかと云へることを以てすと想像せよ。若しも此教育ある人の報告が、すべて斯般の證人より受くることを得べき所の答案より集められたるものなりとせば、わが英國に於ける宗教的信仰の状態に關し、知らず如何なる物語をか其國人に告げ得られたりしなるべきぞ。恐らく彼は、英國、獨逸、其他の國々に於て、恐怖の念を表示するとき

に用ゐらるゝ所の、神が爾を祐くると云へる言語の中に表はるゝものゝ外、他に神なる名稱を決して聞き得ざりしならん。カラウエイ博士が始めてツール族の中に存する神の名稱の一を發見したりしもの、實に斯の如き感歎詞の中よりなせるなりき。牧師の邸宅に住ひし所の或老人に、ウテックンなる言葉が、其牧師の亞弗利加に來りたる後に始めて用ひられたるものなりしか否やにつき尋ねたりし時に、次の如き答を得たり、否、ウテックンなる言葉は、英國人より習得したるものにあらず、こは實に吾等が固有の古語に係れり。即ち人の噴鼻しける時に常に用ひらるゝ言葉にして、ウテックンよ、願くば常に恩恵を以て吾を守りませと云へるもの是れなりと。このウテックンは、ウンクルンクルによりて秘せられたるものにして何人によりても見るとを得べからざるものと想像せらる。人々は嘗てウンクルンクルを認めて萬物の創造者なりとせり。この人々は其ウンクルンクルを造りし所のものを見る能はざりしが故に、このウンクルンクルを指して萬物の創造者なりとなし、これ神なりとなせしなりき。

亞弗利加の未だ文化せざる種族は、猶ほ未だ信仰の積極的形式を保有し得ざ

るの種族なり。即ち以上述べたるが如き粗雑なる断片は、斯般種族の中よりの拾集に係れり。茲に於てか今や此結論として、最早信仰の積極的形式に執着するなき所の人々より起るなる宗教的思想の二三の例證を研究せんとす。予は此等の例證の代表者としてアブルフアズルの兄弟なるフアイジを茲に掲ぐべし。この人は世界の各宗教を比較研究したるの後にモハメットの宗教を擲棄したりき。而して此人に對して、吾人が嘗て述べたりしが如く、バダーオニーなる正教派は、其恐怖を示すに足る程の強力なる罵詈を見出し得ざりしなり。蓋しフアイジは、其同時代の人々が之を呼ぶに異教徒又は神の侮蔑者の名を以て擬したる中の一人なりしも、後代の人々よりは聖人若くは殉教者なりと稱せられ、又は、此世の鹽、世の光なりと讃歎せらる。實にやフアイジは非常なる熱心の人にして、同胞を愛するの念深く、厚く神を信仰したりき、詳言すれば、吾人が知らず識らず崇拜し、人間の思想にても將た國語にても、到底表示し得べからざる不知の神を彼は信仰したりしなり。願ふにポーロがアゼンに於て見たりしものと同一なる此神の祭壇は、あらゆる真正なる信仰者の胸中を永久に去らざらん

かな。

一千の宗派に属する自由思想家の驚くべき演説を證明したりしフアイジの「デイワーン」と名くる書籍を今茲に引用せん。

「予は塵埃となりぬ、されど予の墳墓の香よりして人間は斯の如き塵埃より再生するものなりと人々は信じき。

「人々は初めよりフアイジの終焉を知りたるならん、即ち彼は其生るゝや他に比倫すべきなく、其逝くや又他に較量すべきものなき程の傑物なりき。

「過去の事柄がすべて許さるゝ所の復活の日の集りに於て、カパーが罪は、耶蘇教寺院の塵埃の爲めに赦さるゝならん。

「無始無終に生存する神は、純全圓滿にして、如何なる讃歎の詞を以てするも能く此圓滿の體を表言すべきこと難し、又如何なる目を以てするも神の光を保つこと能はざるべし。

「神の光は理解を融和し、神の光榮は知識を碎破す。然り而して一たび神のことを思惟すれば、理性を粉塵し、神の存在は思想を混惑せしむ。

「神の神聖は、人間の熱慮の血の滴りが、如何に神の知識を求めんとして濺がるゝも、到底徒勞に属すべしと宣告し給ふ。實に人間の理解力は、塵埃の一小分子に過ぎざるなり。

「神の猜忌、神の戸の守護は、人間の顔に打撃を與へて其思想を暗まし、人間の恐なることに對して、打撃を其頸背に與ふ。

「科學は神の完全に達すべき道中に彷徨する、恰かも沙漠の盲目なる沙の如けん。文明の都府は之を神の知識と比較せば、只是れ落漠たる一小村落たるに過ぎず。

「賢人を過誤せしむる所の此道を旅行すべき力は、予の足脚に具はらざるなり。予は酒の香に堪ゆるの力を保有せず。酒の香は實に予の心を混亂せしむ。

「人間の所謂光明の明、又は指導する理性など稱せらるゝものは、畢竟神の光榮の都府を驚きを以て彷徨するものゝ謂のみ。

「人間の智慧と思想とは、之を結合するも猶ほ僅かに神の愛の字母の一文

を綴り得たらんに止まる。

『知識の幼稚なるものも、又稍や進歩せるものも、共に神と合一せんことを熱心に希望す。然りと雖も、初學のものは口さがなく喋々するの徒にして、やゝ進歩せるものは、愚論を囃々するの輩たり。』

『あらゆる人の脳髓は、神を捕捉せばやと慾求する思想に充てり。プラトーの類に、此望みなき思想の熱を以て熱したりき。』

『神の猜忌が、聖者の肝臓に小刀を突込みし時に、予の如き考査を缺無するものは、如何に成効すべきぞや。』

『願くば神の恩恵によりて予の頭腦を清淨ならしめよ、然らずんば、予の休みなき不安の心は、遂に激して狂氣とやなるべからんが故なり。』

『神の國の座の上に頭を低れ、然る後に仰ぎ見ることは、信仰上正當のことにあらず、又真理によりて許されざるべし。』

『ちゝ人間よ、汝の貨幣は身體と精神との二重の押捺を有するを以て、汝の性

質の果して如何なるものなるやを予は知ること能はず。如何となれば汝人間は、天よりも高く、地よりも低きが故なり。』

『汝の骨格組織は、天界と下界との形像を有す、故に汝が撰擇するまゝに或は天上的なれ、或は下界的なれ、をは一に汝の意の如くなるべし。』

『汝の理性に反對して或行爲を敢てすべからず、何を以て之を謂ふ、理性は實に汝の信頼するに足るべき顧問者たればなり。汝の心を錯誤に任すことなかれ、心は虚偽を述ぶる所の愚物なるが故なり。』

『自己の幸福よりも寧ろ他人の幸福を撰べよとの語の、秘密なる意味を理解せんと欲せば、汝は自身を取扱ふに毒を以てし、而して他人をば砂糖を以て取扱ふべし。』

『人々の奉仕する神に汝が仕ふるならば、假令不幸なる場合に遭遇すとも決して悲歎の容貌を呈すべからず、常に嬉々たる顔容をなすべし。』

『希臘の知識に突入したる予の心は、印度の國の深き所より更に躍出したり。汝はこの深き浦灣に陥没したらんが如くあるべし。』



「予が知識の顔面より被物を人々が取去る時は、知識に於て遙かに進歩したる人々の確實なりと稱する事柄も、予に取りては、只是れ思想の微光たるに過ぎざることを知了せん。

「若しも人々が、予の知識の目より遮蔽物を取り去らんに賢者に取りては、天啓(隱者的知識)なりと思考せらるゝものも、予に取りては、畢竟酒に酔ひたる狂氣のみてふことを知らなん。

「若しも予が、心中に存するものを取出して示すことを得んには、自ら怪む、その時代精神なるものが、果して之に堪へ得べきや否やを。

「予の器は時間てふ友情の酒も要求せず、予自身の血液は自己の猛烈なる酒の基礎をなす。」

予は此精神を以て、人類の古代宗教を盡く研究し得たるものたらんことを希望するものなり、所以如何となれば、此等の古代宗教に關して吾人の知る所多きに從ひ、全然虚偽なる宗教一として存在せざるの事實を、愈々益々認識するに至

虚偽なる宗教  
は一として存  
在せず

るを得なければなり。否、或意味に於てはその時代に可能なるを得べかりし唯一の宗教たりしを以て、別言すれば各時代の國語思想及び感情に適應し、世界の各時代に適應せし唯一の宗教たりしを以て、總べての宗教は、各自共に一の眞正なる宗教たりし事實を認識することを得べし。この議論に反對せらるべき論所は吾人之を熟知す。其子及び娘を神々に捧げし火中に投じて焼死せしめたる時に、モロチユの崇拜は果して一の眞正なる宗教なりしか、彼等の寺院の禮拜堂の中に、彼等が其無名ならざるべからざりし所の憎惡の事柄を犯せし時に、そがミリツタの禮拜若くはカーリーの禮拜は、果して一の眞正なる宗教なりしか。徳行と熱慮との最高の報酬は、心頭を全然滅却するにあることを、人々は考へざるべからずと云はゞ、果して此佛陀の教は、一の眞正なる宗教と稱し得らるべきや。

此種の論議は、假令恐るべき復讐の擧を惹起せしめきと雖も、而も是れ黨派を組みて交戦を宣告したるものにぞありし。高尚なる無罪の人々が、子は父と等しけれども父と同じからずと信じ、又此人々は聖母及び聖徒を禮拜せざりしを

以ての故に、之を罪なくして火焰の裡に委し去るが如きものを、果して真正なる宗教と稱せらるべきや。寺院の神聖なる壁の背後に同様なる無名の犯罪を隠蔽する所の宗教は、是れ果して一の真正なる宗教なりと云はるべきか。假令悔悟すとも、之に教るに永久に刑罰の來ることを以てして、未だ嘗て赦罪若くは救済の希望を教へざるが如き宗教、是れ果して一の真正なる宗教なりと呼べるに値せんや。

諸宗教の判断を斯る精神を以てなす人々は、決して諸宗教の真正なる趣意を理解すること能はざるべく、又決して此等の宗教の神聖なる源泉に達すること能はざるべし。此等は實に一切宗教に於ける無用の長物、否、除去し易からざるの贅物なりとす。吾人は人民の健康を判断するに其病院に於てし、其道徳を判断せんに該人民の獄舎に於てせん。若し夫れ或る宗教の正邪を判断せんとす、吾人は出來得る限り其宗教を建設したりし人の心の如何なりしやにつき研究を試みざるべからず、而も此研究不可能(不可能なる場合、寧ろ多數なり)ならんか、ト者の學校又は僧侶の會合等に於けるよりも寂しき部屋若くは病室等に於て

諸宗教の判断は其建設者の心を知るべし

之を發見せんと試むべし。

若し吾人が前述の方針によりて宗教を判断し、又吾人が常に宗教なるものを以て、其宗教が影響を及ぼすべき人民の智力的能力に自ら適應せざるべからざるものなりと云へることを思量しつゝ、あらんには、吾人が嘗て豫期して唯是れ下劣なる迷信及び偶像の誤れる禮拜の外、他に何ものも存するなかるべしとせし宗教中にも、猶ほ且つ真正なる宗教の分子を多少含有せる事を發見し、大に其意外なるに一驚を喫することなしとせず。

夫れ宗教の目的は常に高貴に存す。如何に不完全に、如何に見戯に等しき宗教なりとも、皆是れ共に人心を常に神の目前に置くを例とす。而して神の觀念が如何に幼稚にして、且つ不完全なるにせよ、この神の觀念はいつかは、人間の精神が到達し、把持することを得べき完全高尚なる理想を代表しつつあるなり。故に宗教は人間の精神を其最高なる理想の目前に置き、人間の精神を通常の善行以上に高く標章し、斯くして少くとも日々歩一歩高尚善良なる生活を得ばやと憧憬する念慮、即ち神の光明に浴せる生活を得んと希望を惹起せしむる

宗教の目的は常に高貴なり

宗教的感情の  
古今

ものとす。

宗教的感情の以上述べたる如き古代の表示は、往々にして幼稚のものたることと云ふまでもなし。その表示には不敬的なることあり、又時に反撥的なることすらなしとせず。然れども児童等の間に發達せる宗教の最初の状態を研究するにつき、慈悲的態度を以て之を解釋せざるべからずとの教訓を知らざる父果して何處にありや。苟も父たる身分を以て此等の児童間の中に發達せる宗教の萌芽を研究せんと欲す、所謂一視同仁、慈悲的態度に出づるなくんばあらざるなり。果して然らば世界の古代史中に、これと同様の教訓を知り、且つ人類の幼稚なる時代の宗教的思想を、之と同様なる精神を以て、判斷するを、何が故ぞ人々は之を至難なりと思考するや。神に關する児童等の一見驚くべき不敬的なる疑問を、何人が能く回想せざるものぞ、児童の心にはもと全く罪なきに如何にして純粹なる不敬の念を抱きたりしかを誰か之を知らざらん、恐らくは何人と雖も此等のことを回想し、又知らざるものなかるべし。

斯くの如き幼稚なる宗教の破裂は、殆ど再び繰返されざるものなり。予は其

一例のみを茲に掲擧することとせん。即ち、予は唯一人にて遊び、而して家の中に少くとも神が予を見ること能はざらん一室のあらんことを切望すと叫びつゝ、或児童のなせる驚慌を餘り明白に回想することを得。之を開ける人々は皆震動せられたりき、然れども予は自白す、此児童らしき叫聲は、予の心に取れて、かの、何處へ神の心を離れて予は去るべきや、又何處へ予は神の眼前より逃れゆくべきかと云へるダビッドの讚美歌よりも一層眞理にして、且つ一層驚くべきの感なき能はざるなり。

古代宗教の見戯に等しき國語に就て論ずるも亦如上の見解と異なるなし。

吾人は靜かに云はん、神は全知にして遍在し給ふものなりと。ヘジオッドは太陽を指してゼウスの目なりと云ひ、全般の事物を見且つ認め得べきものなりと云へり。アラト、ス曰く、何れの道路も到る所皆ゼウスに充てり、あらゆる人々の群集せる市場も常にゼウスに充つ、海も港も此ゼウスに充たざる所なく、否、吾等も亦此神の子孫にてあるなりと。

吠陀の頌歌

前に列擧せるものよりは、その年代新しきものなれども、彼のグシシュト、ハが

祈禱を捧げたりし其同一ブルナに關し、次の如く或吠陀の詩に云へり。「此等の世界の天主は、恰かも近く在するが如く何ものを見そなはし給ふ。若し人思惟する時は、此天主私かに歩み寄りて様子を窺ひ、神々は人間の思惟せることを全知し給へり。若人歩行し又は乗馬する時、若くは起臥し又は二人會して密話することある時は、此等盡く残らずブルナ王は知ろしめし給ひ、實に第三者として二人私語の中に立ち給ふなり。この大地も亦ブルナに屬し、蒼々たる天空また然り。二個の海即ち空と大洋はブルナの腰部にして、一小清水の中にもブルナ神は包含せらる。天空を越へて遙か彼方に逃げ行く人あるとも、決して此ブルナ王の監督を免るゝこと能はじ。天主の間諜は、天上より此世に下り來り、千の眼を以て大地を瞰視し給ふ。即ちブルナ王は天地間のこと及び天地を超へて存するこの一切を、残さず了知し給ふなり。天主は吾等の眼の一瞬だも計算し、遊戯者が骰子を投ずる如く一切の事柄を決し給ふ」と。

此頌歌の中に見重らしきことを多く含み、未だ以て神と稱せらるゝに足らざる表示さへ含めることを予と雖も否定する能はず。然れども若し此等の頌歌

を作りたる人々の國語と思想とを見、三千年以上の往時にありたる此等の思想を觀察すれば、此等の深き思想を顯はすに、彼等が純粹なる幸福なる表示を以てせりしことは、寧ろ不思議に思はれ、吾人の耳に物騒がしく聞ゆる所の、その偶然なる粗雑を敢て不思議となさざるなり。

次に記する所は、印度人が耶蘇教に改宗して福音を故國の地に宣傳すべく、印度に歸り來れる時に述べたる言詞なりとす。即ち、今や予は汝の經典が總べて無意味となり、耶蘇教の新舊兩約書を除けば、他に善良なるもの一として見るべからずなりぬ」と云ひつゝ、人民の感情を害せんが爲めに歸り來れるものにあらず。誠に諸君に告げん、予は故國の哲學者道德家及び詩人を引用し同時に此等の予の爲さんとする所の志望にこそあれ。この志望を實行すべきが爲めに、最大ならんと欲するものは、最小なるべしとの金言を服膺せざるべからず。諸君は此金言を無意味となすなかれ、所以如何となれば、そはわが救世主の金言なればなり。即ち、汝等の中にて主長たらんと欲するものは、何人にても其ものをして

汝等の奴僕たらしめよとの救世主の金言存するを以てなり。懇切に、熱心に、且つ身命をすら捧げつゝあるにも拘らず、世の宣教師等は此等の事柄を知らず、而して生ける印度の名稱を有する事柄を全然排斥し去らんと欲す。埃及に旅行せんか諸君は美厖に彫刻せられ、裝飾せられたる石の斷片を發見せらるゝならん、蓋し此石は、或大なる建物の一部分たりしものなるべし。此等の石の斷片を驗すれば、諸君は此建築が如何に宏壯なりしかを想像し得らるゝならん。印度を旅行して、人民の普通の言語を審査せよ、然らば諸君は、如何なる宏壯なる宗教を印度の宗教が有せしことを見て、驚愕措く所を知らざるべし」と。

古代の國語は之を取扱ふに困難なる道具にして、殊に宗教的目的に使用せんには極めて困難なりとす。比喩を以てするの外、そが抽象的思想を表示するとは不可能たらん。然れども古代宗教の全辭書は全然比喩より成立するものなりと云はゞ、是れ稍や過言に失せずや。此等の比喩は吾人之を悉皆忘失したんぬ。吾人は呼吸を考へず、に精神を論じ、空を考へず、に天を論じ、放免を考へず、に赦罪を論じ、口實を考へずして、天啓を論ぜんとはす。然れども古代の國語に

## 古代國語の困難

於ては、此等の言語のすべて、否、感覺的物體に關せざる一切の言語は猶未だ師の狀態に存せるものなり。話者及聞者は種々なる才能に従ひ、其言葉の性質に於いて、或は高く、或は低きがあり、又半ば物質的にして半ば精神的なるがあり。是れ實に吾人が茲に誤解を招致するに至るの根源にして、此等の誤解たるや、多くは古代の宗教及び神話等に保存せらるるものとす。古代宗教の發達中に認めらるべき二個の顯著なる傾向あり。一方に於ては、國語の物質的性質に反對する心の争闘にして、多くの言葉の中より其の粗雑なる被物を剝ぎ去り、そが抽象的思想を顯はすの目的の爲めに絶へず、此等の言葉を適當に處置せんと試むるところの心的争闘あり。然れども又他方に於ては、精神的性質より物質的性質に絶へず、逆戻する所のあるありて、そが精神的意味を用ふる代りに、物質的意味を用ふる偏頗なるもの、絶へず行はれつゝあるなり。この活動と反動とは最初の時代より現時に至るまで、綿々として、宗教の國語中に行はれつゝあるなり。

人間の思想の此流出と逆流とよりして、宗教が能く免るゝことを得ざるもの、

## 宗教の生命

一見實に是れ宗教に於ける惡運的要素なるに似たり。蓋し此人間の思想は實にあらゆる時代に於て、父と子、母と娘との間に、少くとも一たびは繰返したるものにぞありし。然りと雖も、若し吾人が此宗教の惡運的要素とも稱すべきものを一層精細に試験する時は、件の流出と逆流とは、正しく宗教の生命をなすものなることを發見するに至るべし。

初めて空を崇拜したりと稱せらるゝ人々の位置に、諸子自身を置かれよ。吾人は此等の人々が空を崇拜し、又空は彼等の神なりしと云へることを云はんとするにあり。是れ或意味に於て眞理なり、然れども此言は又或意味に於て、通常斯からん思想を表述するに用ゐらるべきものと大に同じからず。今述ぶるが如き意味に於て、神なる語を吾人が用ひ、然る後に空は彼等の神なりきと云はゞ、これ不可能なりてふことを云はんと欲するに似たり。吾人の使用するが如き意味に於て、神なる言葉——拉句語の Deus、梵語の देव、希臘語の θεός と云へるが如き言葉は、一般の賓辭として使用せらるべきものなり——は、思想と言語との歴史に於ける古代にありては存在せず、又存在すること能はざりしものとす。

古代の宗教を  
理解せんと欲す  
ば先づ古代の  
國語を先づ理  
解せざるべから  
ず

國語の最初の  
材料

古代の宗教を理解せんと欲せば、先づ始めに古代の國語を理解せんと試みざるべからず。

吾人が只五官によりてのみ感ずることを得べき感覺を云ひ表はすべき言葉を國語の最初の材料こそ之を供給するものなれと記憶せよ。されば若し、燃ゆる光る、温む等の意味を有する一の語根ありとすれば、斯の如き語根は、太陽及び空を示すに使用せらるゝ名稱を供給したるものにやあるべき。

然れども空なる名稱が、その物質的物體より分裂され、全然空なるものと異なる或物を示すの名稱として使用せらるゝ以前に當りて、人心中に起りたる變遷につき、吾人をして出來得る限り能く想像する所あらしめよ。夫れ人間の精神中には、吾人の抽象的言語を以て、最初より如何に之に名付るにもせよ、不完全なりとか、薄弱なりとか、將た依頼するとかの感情は、絶へず存在を缺かざりしなり。何故に此感情の存在したりしかの理由は、恰かも生れしばかりの幼兒が、饑と渴とを直ちに感ずることの何の理由なるかを知らざると等しく、爾かく不知なるべし。さりながら此感情の最早より存したるの一事に至りては、誣ゆべく

生の從來する所、死の趨く所を知らず

もあらず、否、現今に於ても亦昔日と變異あるなし。人は何所より來りて何所に行くべきかを知らず、人間は其指導者を求め、朋友を求め、自己の信頼せんとする或人を求めて極疲労し、又天に在せる父の如き或者を求めんとはするなり。人間が外界の事物より受けたる一切の感覺に加ふるに、それが人間の精神中には、内部より發生する強烈なる刺激ありて存す、即ち他のものゝ如く發生し來ること能はざる底の或ものと呼び求むる所の歎聲若くは渴望の念慮是れなり。換言すれば人間は嘗て存在し、現に存在し、永久に存在すべく總べてのものを支持し得て、人をして此假幻の娑婆界に於て、宛然我家にあるが如く心坦然として慰安を感ぜしむる所の或ものを求めんと欲するなり。この大體の渴望が一たび或確固たる形體を具ふる以前に於て、その之を渴望するの念は、豫め先づ之に名稱を附せざるべからざりき。即ち名稱を之に附するにあらずんば、此渴望の念は充分明確に其何ものたるかを把持し、認識すること能はざりしなり。只知らず其名稱、夫れ如何が之に附すべき。蓋し國語の倉庫や疑ひもなく横はりありきと雖も、嘗て試みられたりし名稱は、全然不當なりしを以て、人間の心は此名稱を

忌避しぬ。この名稱は内部に活動し、光明と自由とを渴仰する所の思想を活動せしむるよりも、寧ろ之を束縛するが如き觀ありしかば、雖て此名稱は人間の心より隔離せられたるなりき。

然れども一の名稱又は多數の名稱遂に試みられ、撰擇せられたるの時に、如何なる事柄が人心の上に惹起するを審査せざるべからず。この場合には、設し疑ひもなく不完全なりしとせんも、兎にも角にも一名稱若くは數名稱發見せられたりしが故に、願ふに或満足を得たりしならん。然るに此等の名稱は、その他の名稱と同じく一の記號たるに過ぎざりしを以て、憐むべき不完全の記號たるを免れざりき。即ち是れ賓辭のみ、而して人心中に眠れる彼の廣大なる思想に種々なる部分的小區を示したる賓辭なりしのみ。輝ける空の名稱撰擇せられしや、果して此空は其表示すべき言葉を心に欲せし如く遺憾なく表示せられたりきとなすか。これによりて心は満足せられたりしか。空は空の神として承認せられたりしや。否々、未だ此域へは達せざりしなり。その見得べき空を見て考へたりしことを、人々は充分によく知るを得たり、即ち我欲する所に副ふべき

名稱なきやと四周を願望し、遂に疲勞の極、止むなく或ものは皆無に勝るとなして空なる名稱を把持したる最初の人、その人の成効は、畢竟これ不幸なる運命なりしことを能く知るを得たるなりき。疑ひもなく輝ける空は最も高尚にして、實に其附名せられたる唯一の不變無限者にぞありし、即ち當時人心を不安ならしめし所の、その未だ發生せざりし無限てふ思想に對し、件の名稱を貸附し得たる所の唯一の不變無限者にてありけるなり。されど、此名稱を選出したる人は、吾人の見得べき空を以て自己の欲する全體なりとなし、又上空にかゝる青蒼の天蓋を以て、自己の崇拜すべき神なりとなせしものにあらず、又爾かくなし能はざりしものなりとの事實を、明白に了解し置かんを要す。

空なる名稱が前述しけん如くして附せられ、採用せられし時に、果して如何なる事柄の誘起せられたるかに注意せざるべからず。假令不完全なるにもせよ、斯からん名稱を求め、發見することは、實にかのヤコブの如く、自家の心中に存したる神の理想を以て之を是認し、之を公示し、之に名稱を附與し得るまで世と奮闘することを得たりし男兒らしき人間、詩人、豫言者若くは教長の任務なりとす。

而して此名稱は、其老若者と恐なる小兒とを問はず、又老耄せる祖母に論なく、總べて共に使用せらるゝものなるが故に、此等の人々の爲めに誤解せらるゝなくして使用し得らるゝは、到底不可能のことに屬す。即ち誤解の第一は、それが同一の名稱によりて呼ばるゝ所のものの住處として此空を觀察することは、是れ第二の誤解は、此空なる名稱の裏面に存せし事柄を全然忘却し去りて、吾等の頭上に高く懸絶せる青天蓋、即ちその見得らるべき天空を切願し、此空より雨を降らして、原野、家畜、穀物を保護し、日々の食物を人間に給與するやう庶幾するにあり。否な此天空とは其見得らるべき天空を指せるものにあらずして、即ち予の意味する所は、上は高く、下は深く、遙かに青蒼の碧落より離れたる或もの、謂なりと、爾かく堂々として天下に警告したりし人々は、忽ちにして何人にもこれ一の夢想者なりと考へられ、何人にも其意味了解せられずして、天空即ち世界の大恩惠者を誹謗したる不信心者なりと見做されたりしなり。斯くてぞ此見得らるべき天空に關して眞實なるべき多くの事柄は、遂に天空と云へる神聖なる同名詞につきて論ぜらるゝに至るべく、嘗て此不明なる名稱の下に隠れたる所の神の



宗教の方言的  
生命

總べての根跡を破壊すべき傳説は茲に其發生を見るに至るべしとす。

古代の宗教と近代の宗教とに於て、到底避くべくもあらぬ斯般の種々なる觀念並に斯般の誤解を稱して之を、方言の發生と衰頹と呼び又、宗教の方言的生命とも呼ばんとす。この宗教の方言的生命は、國語と思想とを正當に批評するにつき、如何に重要なるものなるかを知らん。宗教の國語に於ける方言的蔭影は、殆ど無量無邊なり、而して此等の方言的蔭影は、それが衰頹を説明することを得るは勿論、同時に亦宗教の生命をも辨明することを得るものなり。ヤコブ、グリュムが、その詩的様式の一に於て、高地獨逸語と低地獨逸語との起源、梵語とブラーリット語との起源及びドリツク語とアイオニツク語との起源を説明するに、そが高地方言は元來男子の國語にして、低地方言は婦人及び小兒の國語なりと云ひしことを、諸子は尙ほ記憶せらるゝならん。宗教の國語中にも亦グリュムの語と並行せる同様の潮流ありて存するを知るべし、即ち宗教的國語の中にも高き方言あり、低き方言あり、廣き方言あり、狭き方言あり、大人の方言、小兒の方言あり、僧侶の方言、俗人の方言あり、繁盛なる市街に於て使用せらるゝものと、空寂たる

天空の語には  
固より物質的  
以上の意識あ  
り

閑室に於て使用せらるゝ方言とあり。小兒が漸次成長して大人となるに従ひ、育母の言葉を忘れゆくに等しく、此成長し行くもの、宗教も亦、女性的方言より漸次男性的方言に翻譯せられずんばあらず。然れども此變遷は、決して一の争闘なしには起り得るものにあらず、蓋し宗教をして停滯せしめざるや、絶へず念ずる所の此希望が、再び茲に活き歸り來る所以のもの、是れ實に此絶へず循環して止まる所なきの争闘にあるなり。最初の宗教より最後の宗教に至るまで、何れの宗教と雖も、皆この二個の反對せる兩極の中間に彷徨しつゝあるものなるを以て、若しも一方の引力強大となりて健全なる運動茲に中止し、停滯と衰頹か相尋て來るならんには、兩極即ち合して一となるべし。宗教にして若し一方小兒等の能力に適應する能はず、又他方に於て大人の要求を満足せしむること能はざる場合には、件の宗教や其活力を失却して、單純なる迷信のものとなるか、然らずんば單純なる哲學となり了らんのみ。

若し夫れ明了に予の意見を發表することに成功したりとせんか、如何に下劣なる宗教にありても、其處には眞理ありと云へる予の意味の果して如何なりし

やてふことを充分能く理解せられつらんと信ず。既に物質的意味に使用せらるゝことなく、更に高尚なる意味に於て使用せらるゝ所の天空と云へるが如き名稱を、その最初に使用せんとするの希望は正當のことなりき。其精神は望まじき所なれども、悲しや國語は薄弱なりし。蓋し心的變遷は、通常想像せらるゝが如く、神の確固たる思想と天空とを同一視することにはあらざりき。斯くの如き心的變遷は、僅かにして理解せらるべきものなり。之に反して斯くの如き心的變遷は、少くとも神の最も顯著なる性質の一を隱喩的になすべき一名稱を以て、神の無限なる感覺を確定せんとする最初の企圖にこそありけれ。予は更に繰返して云はん、神の此名稱を最初に構成したる人は、吾人がこれを天の王國と呼ぶ時に、其天のことを物質的に考へざりしと同じく、決して物質的天國の思想を有せざりしならんと。

## 多名詞

若しも吾人が、單に古代宗教の性質や如何なるものなりしと云へることを記憶すれば、假令往々にして奇異視せられたりしことも遺憾なく記憶せらるべき所の彼の古代の宗教の性質につき、更に開陳する所あらんとす。夫れ古代の國

語には、殊に同意義の語多く、更に正確に云はゞ、古代の國語中には、それが同一の物體にして數多の名稱に呼ばるゝことあり、即ち多名詞なるもの流行したりき。近代の國語にありては、概して一物體に一名稱を限り有するに過ぎざれども、古代の國語、希臘語、亞刺比亞語等に於ては、同一の物體を示すに多數の語を有し、之を自由に選出して使用せられたるなり。斯の如き傾向あることは、是れ極めて自然的なりと云ふべし。一切の名稱は其名付けらるべきものゝ或一方面のみを示し得たるものなりしかば、その部分的名詞に満足する能はざるの結果、國語の最初の構成者は、續々名稱を案出し遂に時の經由するに従ひ、そが格段なる目的に最も有益なりと認められたる名稱のみ保存せらるゝに至りぬ。例せば空は雷に輝けるものと稱せらるゝに止らず、暗き空、被へる空、雷鳴のある空、雨降らす空など、呼ばれつ。是れ即ち國語の多名詞にして、宗教上に多神教と稱するものは此多名詞に外ならざるなり。輝ける空の名稱を神の名稱として用うることに於て、最初の満足を見出せし所の心的渴望は、又更に其輝きを示さざる他の天空の名稱を直ちに把持すべく、神が暗黒として畏怖すべきもの、全然のもの

として認識せらるべき宗教的様式に、一層適應せる名稱を發見せんんと欲するなるべし。例せば吾人はドヤウスと云へる名の外に、蓋へる空と云へる即ちゾルナなる名稱を發見す。此ゾルナなる名稱は、もと神に名付くる一種の方法なりしが、ドヤウスの名稱と等しく、忽ちにして一の分離したる獨立のものとなるに至りぬ。

上述したる所のみにては猶ほ未だ缺けたる所あり。選擇せられたりし所の多くの名稱の完全ならざりしこと、神の圓滿と無限とを示すに此等の名稱の適當ならざりしことは、更に名稱を新しく探出するの念慮を惹起せしめ、神に近接することの發見せらるべき其自然の各部分が、遍在の名稱として選ばれるに至るまでは、件の念慮絶へて休止せざりき。若しも神の現在が強風中に認めらるゝなれば、その風即ち神の名稱となり、又夫れが地震及び火事等に於て認めらるゝなれば、地震と火事とは其の名稱となりけるなり。

諸子は尙ほ其多神教若くは神話を見て不思議に思はるゝや。實に此等の多神教及び神話なるものは、到底避くべくもあらぬ現象なりとす。この兩者は之

神の名の種々なること

多神教或は神話

を宗教の幼稚時代なりと稱して可ならん。蓋し世界には嘗て幼稚時代ありき、此幼稚時代に於ては、世界は小兒の如く話し、小兒の如く理解し、小兒の如く思考し、又小兒の如き言葉を用ひ、小兒の信ずる如き宗教を信じたりし事實も疑を容るべからず。若しも小兒の言葉を大人の言語なりと主張し、古代の國語をば文字通りに近代の國語に譯し、東洋の國語を西洋の語に文字通りに譯し、韻文をば文字通りに散文に翻譯せんと欲す、必ずや誤なからざるを得ず。

耶和華の頭、顔、口、唇、息と云へる語を、文字通りに解釋する譯者設しありとするも、現今にては其數頗ぶる僅少となれるは、事實誣ゆべからざるなり。

詩人ダンテ、そのバラディーニに於て歌ふて曰く、

Per questo la Scrittura. Ondescende

A vostra facultate, e piedi e mano

Attribuisce a Dio, et altro intende.

吾人の最も正直にして且つ最も博識なる神學者の一人が、神は此等の語を話し給ひ、述べ給ひきと云へるが如き聖書の内容を、最早其祭壇上より讀むに堪へ

神の頭、顔、口、唇、息等の語

ずとのことを宣言するを聞かば、知らず其意味する所や果して何んぞ。その口と唇と息とに對して、吾人が能く承認を與ふるものとせば、かの多種の言葉と其言葉の發音とに就ても亦確かに同様なる承認をなすことを得ん。古代の國語は小兒の國語なり、一層抽象的なる名詞を以て、無邊者及び神に達せんと試みるならんか、恰かも人は、かの天空に達せんとして梯子を置かんと試むる所の小兒等に比して多くの異なる所なく、その幼稚なる寧ろ驚くに堪へたるを了知すべし。

宗教に於ける幼稚時代は猶未だ消滅せず、又決して消滅するなけん。印度の宗教の如きは、予の見解を以てすれば、十九世紀の白晝に徘徊する半ば化石せる大獺獸の如き幼稚なる宗教にして、此外なほ他にも古代宗教の二三のものは、現今に至るまで保存せらるゝなり。否、これ等の古代宗教が尙ほ現存するのみならず、わが新約書中に於てすら、國語は何によりて構成せらるゝかを知り、譬喩の何たるかを聞くべき耳を有し、且つ其譬喩の真正なる意味をも理解すべき心意を具ふる人々のみ、其眞意を明知し得べからしむるが如き事柄多數あるをや。

宗教の幼稚時代は決して消滅せず

古代宗教の解釋は慈悲的ならざるべからず

如上論じ來れる所の要領は、吾人が彼の小兒等の發音に最も大なる慈悲的解釋を與ふると等しく、一見誤れりと見做さるゝ所の過失、癡愚なる事柄、否、古代宗教の畏怖をすら解するに當り、これと異なるなき慈悲的解釋、即ち偏頗なき公平の心を以てせざるべからずと云へることは是れなり。パピロニア人の最古の神たるベールヌが自己の頭を斬り、それより流れ出づる血を塵埃と混じて、此混和物より人間を作り給へりと云へる物語を見れば、甚だ恐ろしき感覺を感ずべし。然れども素とこの神話によりて示さんと企圖せられしことは、神聖なる神の生命の二要素、人間中に存すてふことを述べんとしたるに外ならず、即ち吾等も亦共に神の子孫なりと云へる思想を表はさんと企圖したるに他ならざりしなり。埃及の宗教的儀式を記せる書籍の第十七章にも、これと同一なる思想存在せり、即ち太陽自ら傷きて其血液の流れより萬物を創造し給へりと思想ありたり。創世記の著者も亦これと等しき思想を示さんと欲せし時に唯之と同様なる人間的、記號的國語を使用するだけに止め、「神は土地の塵より人間を造り、その鼻穴より生命の呼吸を吹入れ給へり」と云ふに止めたりき。

結論

他の諸宗教の神聖なる書物を註釋する場合に、偏頗なく理論的ならざるべからざることを知らば、吾等自身の宗教を解釋する場合にも、吾人は同じく公平にして推理的ならざるべからざること瞭として火を見るが如けん。若し文字通りに解釋せらるゝならんか、既に其真正なる且つ原始的なる目的を失却せざるべからざるが如き言葉に、取て又文字通りの意味を附せんと試むるには及ばざるべし。吾人は又最早や法律と豫言とを以て、恰かも是れ現世紀の英語にて記されたるものゝ如く解釋することをなさざるべし、即ち吾人は此等の法律並に豫言を多くの困難に對して準備し、何等の反駁も怖忌せざる底の真正なる歴史的精神を以て閱讀せんを要す、即ち此真正なる歴史的精神は、古代の國語と古代の思想とを研究する歴史家に取ては實に現代に於ける最強力の確證となり、古代の神聖なる書籍の眞理となりなん。されば吾人等自身の神聖なる宗教の書籍なればとて、之を他國民の神聖なる書籍に比して別格に優待し、格別に冷遇すべき理由あるなし、乃ち斯の如くにして吾人の神聖なる書籍は、過去三世紀の人工的、非歴史的の學說によりて殆ど破壊し去られんとしたる其嘗て有したり

し位置と勢力とを再び把持することを得べしとす。

## 比較宗教學 終

製並附奧學教宗較比

明治四十年三月十六日印刷  
明治四十年三月二十日發行

並製定價金四拾錢

著作  
所有

譯者 南條文雄

東京市日本橋區本町三丁目八番地

發行者 大橋新太郎

東京市牛込區市夕谷加賀町一丁目十二番地

印刷者 飯田三千太郎

東京市牛込區市夕谷加賀町一丁目十二番地

印刷所 株式會社 秀英舍第一工場

發兌元

東京市日本橋區本町三丁目

博文館

每編各專門  
諸大家執筆

帝國百科全書

全 部 二 百 冊  
每卷紙數約三百廿頁  
總紙數約六萬六千頁

|        |       |       |       |       |       |       |       |       |      |       |       |       |       |       |       |       |       |       |      |
|--------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|------|
| (二一)   | (二二)  | (二三)  | (二四)  | (二五)  | (二六)  | (二七)  | (二八)  | (二九)  | (三十) | (三一)  | (三二)  | (三三)  | (三四)  | (三五)  | (三六)  | (三七)  | (三八)  | (三九)  | (四十) |
| 議地會及政黨 | 獨逸文章  | 佛蘭西文  | 東洋歷史  | 行政法   | 銀行論   | 家行各論  | 支那哲學  | 園藝學   | 衛生學  | 刑罰學   | 新學    | 保險學   | 世界本學  | 日本院學  | 水支法   | 議院法   | 支那法   | 露支法   | 政治學  |
| 論      | 論     | 論     | 論     | 論     | 論     | 論     | 論     | 論     | 論    | 論     | 論     | 論     | 論     | 論     | 論     | 論     | 論     | 論     | 論    |
| (四一)   | (四二)  | (四三)  | (四四)  | (四五)  | (四六)  | (四七)  | (四八)  | (四九)  | (五十) | (五一)  | (五二)  | (五三)  | (五四)  | (五五)  | (五六)  | (五七)  | (五八)  | (五九)  | (六十) |
| 現金     | 作物    | 應業    | 改良    | 西     | 學     | 論     | 史     | 學     | 學    | 學     | 學     | 學     | 學     | 學     | 學     | 學     | 學     | 學     | 學    |
| 論      | 論     | 論     | 論     | 論     | 論     | 論     | 論     | 論     | 論    | 論     | 論     | 論     | 論     | 論     | 論     | 論     | 論     | 論     | 論    |
| (六一)   | (六二)  | (六三)  | (六四)  | (六五)  | (六六)  | (六七)  | (六八)  | (六九)  | (七十) | (七一)  | (七二)  | (七三)  | (七四)  | (七五)  | (七六)  | (七七)  | (七八)  | (七九)  | (八十) |
| 亞細亞    | 策論    | 學     | 學     | 學     | 學     | 學     | 學     | 學     | 學    | 學     | 學     | 學     | 學     | 學     | 學     | 學     | 學     | 學     | 學    |
| 論      | 論     | 論     | 論     | 論     | 論     | 論     | 論     | 論     | 論    | 論     | 論     | 論     | 論     | 論     | 論     | 論     | 論     | 論     | 論    |
| (八十一)  | (八十二) | (八十三) | (八十四) | (八十五) | (八十六) | (八十七) | (八十八) | (八十九) | (九十) | (九十一) | (九十二) | (九十三) | (九十四) | (九十五) | (九十六) | (九十七) | (九十八) | (九十九) | (一百) |
| 北      | 米     | 合     | 衆     | 國     | 史     |       |       |       |      |       |       |       |       |       |       |       |       |       |      |
| 論      | 論     | 論     | 論     | 論     | 論     | 論     | 論     | 論     | 論    | 論     | 論     | 論     | 論     | 論     | 論     | 論     | 論     | 論     | 論    |

定價

並製

稅郵

稅郵

|                             |                        |                       |                             |                              |       |       |       |       |      |       |       |       |       |       |       |       |       |       |      |
|-----------------------------|------------------------|-----------------------|-----------------------------|------------------------------|-------|-------|-------|-------|------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|------|
| (二一)                        | (二二)                   | (二三)                  | (二四)                        | (二五)                         | (二六)  | (二七)  | (二八)  | (二九)  | (三十) | (三一)  | (三二)  | (三三)  | (三四)  | (三五)  | (三六)  | (三七)  | (三八)  | (三九)  | (四十) |
| 政最露支議水日世保新刑衛園支家行銀心養行行東      | 治近國那院本界險撰事生藝那政行新理製及法判歷 | 地外侵法法產文教動物認化通學各論附絲    | 理交略制提明度學法學各論外               | 學史史史要學史論論下上論學論史學論替國學論論論史下上   |       |       |       |       |      |       |       |       |       |       |       |       |       |       |      |
| (四一)                        | (四二)                   | (四三)                  | (四四)                        | (四五)                         | (四六)  | (四七)  | (四八)  | (四九)  | (五十) | (五一)  | (五二)  | (五三)  | (五四)  | (五五)  | (五六)  | (五七)  | (五八)  | (五九)  | (六十) |
| 清韓鑛進社佛朝宗應獸政經世兒食園日日比地植世新工稻金現 | 國國會教教用醫治政界童藝本本較物界撰業作代  | 商新物化倫鮮新學策術理各教學話理民重改良西 | 業地地學化分                      | 理理學論學論史論析論史論下上學論論史史學學學史學策論論亞 |       |       |       |       |      |       |       |       |       |       |       |       |       |       |      |
| (六一)                        | (六二)                   | (六三)                  | (六四)                        | (六五)                         | (六六)  | (六七)  | (六八)  | (六九)  | (七十) | (七一)  | (七二)  | (七三)  | (七四)  | (七五)  | (七六)  | (七七)  | (七八)  | (七九)  | (八十) |
| 日本較國界語洋學發文倫口教心治家世物天人文美音     | 文宗文文哲術發文音理             | 章教學學學學概生明美音理          | 史學史史下上史論論學史術學學典學學學學學下上學學史史史 |                              |       |       |       |       |      |       |       |       |       |       |       |       |       |       |      |
| (八十一)                       | (八十二)                  | (八十三)                 | (八十四)                       | (八十五)                        | (八十六) | (八十七) | (八十八) | (八十九) | (九十) | (九十一) | (九十二) | (九十三) | (九十四) | (九十五) | (九十六) | (九十七) | (九十八) | (九十九) | (一百) |
| 批解新農農教近植應經農增改世新無邦有新農星       | 評說撰解藝世物用濟業栽界微機語撰用      | 日本析幾化象新械汎濟各教積分逸化角具    | 典何學學學學學論學論學論學論學論學論學論學論學論學   |                              |       |       |       |       |      |       |       |       |       |       |       |       |       |       |      |

二百編ニテ完結





|            |            |            |            |            |           |          |            |            |            |            |           |             |           |           |            |           |
|------------|------------|------------|------------|------------|-----------|----------|------------|------------|------------|------------|-----------|-------------|-----------|-----------|------------|-----------|
| 近世美術史(二册)  | 世界美術史(三册)  | 近世美術史(二册)  | 佛世哲學       | 宗教哲學       | 支那哲學      | 西洋哲學     | 處世哲學       | 純正學        | 哲學         | 修辭         | 日本口語      | 邦語佛蘭西文典(上下) | 邦語獨逸文章論   | 邦語獨逸文典    | 邦語英文文典     | 國語學       |
| 文學士小川銀次郎君著 | 文學士小川銀次郎君著 | 文學士小川銀次郎君著 | 文學博士石原即開君著 | 文學博士石原即開君著 | 文學士中內義一君著 | 文學士岡島誘君著 | 文學博士蟹江義九君著 | 文學博士蟹江義九君著 | 文學博士井上圓了君著 | 文學士武島又次郎君著 | 文學士鈴木暢幸君著 | 文學士松井知時君著   | 文學士青木昌吉君著 | 文學士青木昌吉君著 | 文學士畔柳郁太郎君著 | 文學士岡田正美君著 |
| 文學士飯塚啓君著   | 文學士飯塚啓君著   | 文學士飯塚啓君著   | 文學士飯塚啓君著   | 文學士飯塚啓君著   | 文學士飯塚啓君著  | 文學士飯塚啓君著 | 文學士飯塚啓君著   | 文學士飯塚啓君著   | 文學士飯塚啓君著   | 文學士飯塚啓君著   | 文學士飯塚啓君著  | 文學士飯塚啓君著    | 文學士飯塚啓君著  | 文學士飯塚啓君著  | 文學士飯塚啓君著   | 文學士飯塚啓君著  |

|            |            |           |           |           |           |           |           |           |           |           |           |           |           |           |           |           |
|------------|------------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|
| 西洋論        | 社會         | 比較        | 進化        | 倫理        | 社會        | 心理        | 社會        | 兒童        | 世界        | 日本        | 支那        | 世界        | 宗教        | 社會        | 心理        | 社會        |
| 文學士石倉小三郎君著 | 文學士高山林次郎君著 | 文學士高木敏雄君著 | 文學士高木敏雄君著 | 文學士高木敏雄君著 | 文學士高木敏雄君著 | 文學士高木敏雄君著 | 文學士高木敏雄君著 | 文學士高木敏雄君著 | 文學士高木敏雄君著 | 文學士高木敏雄君著 | 文學士高木敏雄君著 | 文學士高木敏雄君著 | 文學士高木敏雄君著 | 文學士高木敏雄君著 | 文學士高木敏雄君著 | 文學士高木敏雄君著 |
| 文學士高木敏雄君著  | 文學士高木敏雄君著  | 文學士高木敏雄君著 | 文學士高木敏雄君著 | 文學士高木敏雄君著 | 文學士高木敏雄君著 | 文學士高木敏雄君著 | 文學士高木敏雄君著 | 文學士高木敏雄君著 | 文學士高木敏雄君著 | 文學士高木敏雄君著 | 文學士高木敏雄君著 | 文學士高木敏雄君著 | 文學士高木敏雄君著 | 文學士高木敏雄君著 | 文學士高木敏雄君著 | 文學士高木敏雄君著 |

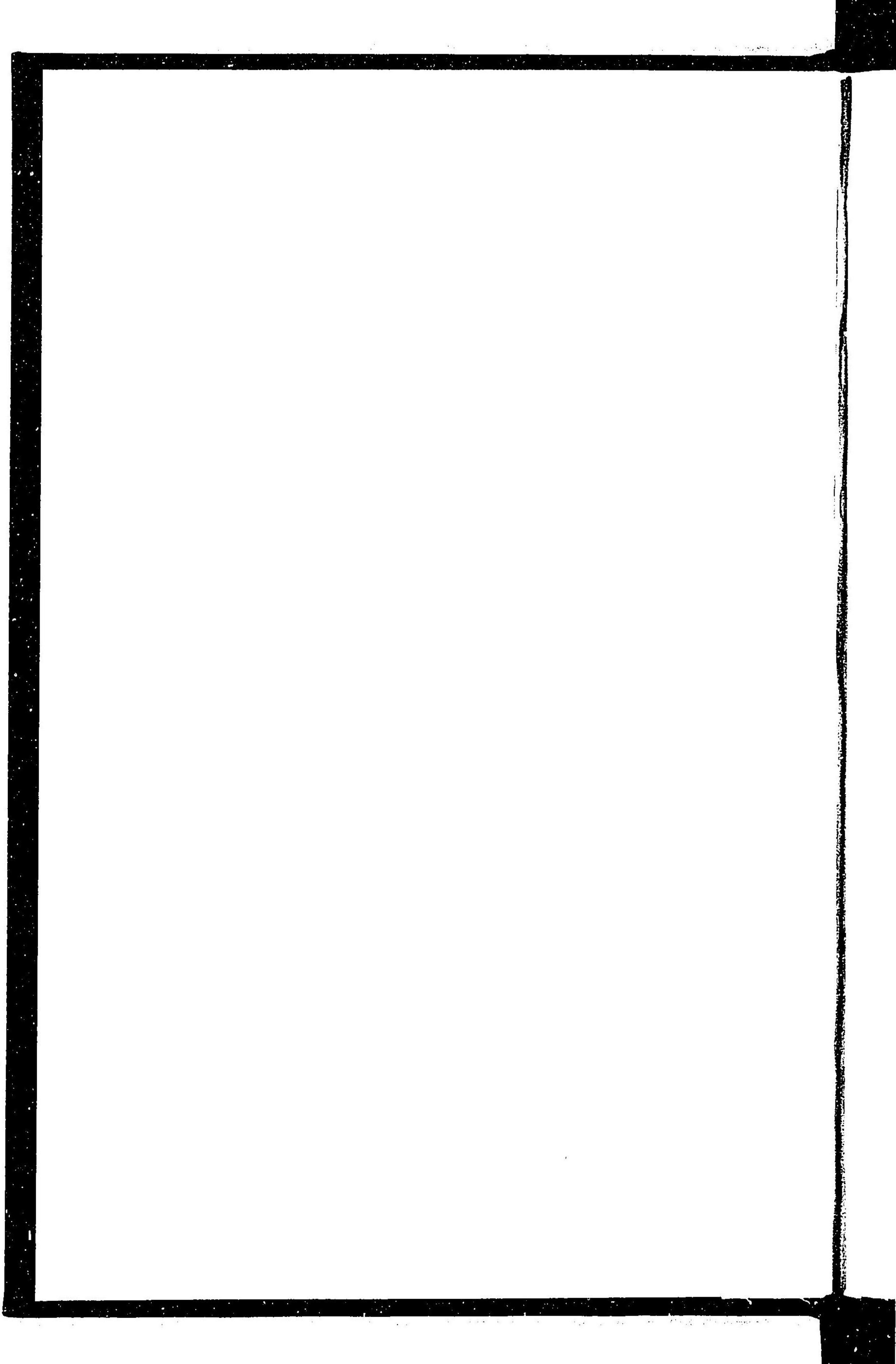
|          |          |          |          |          |          |          |          |          |          |          |          |          |
|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|
| 動物學      | 植物學      | 應用學      | 高等學      | 最近學      | 普通學      | 衛生學      | 無機化學     | 有機化學     | 佛倫理學     | 最新學      | 教育學      | 發音學      |
| 文學士飯塚啓君著 | 文學士飯塚啓君著 | 文學士飯塚啓君著 | 文學士飯塚啓君著 | 文學士飯塚啓君著 | 文學士飯塚啓君著 | 文學士飯塚啓君著 | 文學士飯塚啓君著 | 文學士飯塚啓君著 | 文學士飯塚啓君著 | 文學士飯塚啓君著 | 文學士飯塚啓君著 | 文學士飯塚啓君著 |
| 文學士飯塚啓君著 | 文學士飯塚啓君著 | 文學士飯塚啓君著 | 文學士飯塚啓君著 | 文學士飯塚啓君著 | 文學士飯塚啓君著 | 文學士飯塚啓君著 | 文學士飯塚啓君著 | 文學士飯塚啓君著 | 文學士飯塚啓君著 | 文學士飯塚啓君著 | 文學士飯塚啓君著 | 文學士飯塚啓君著 |

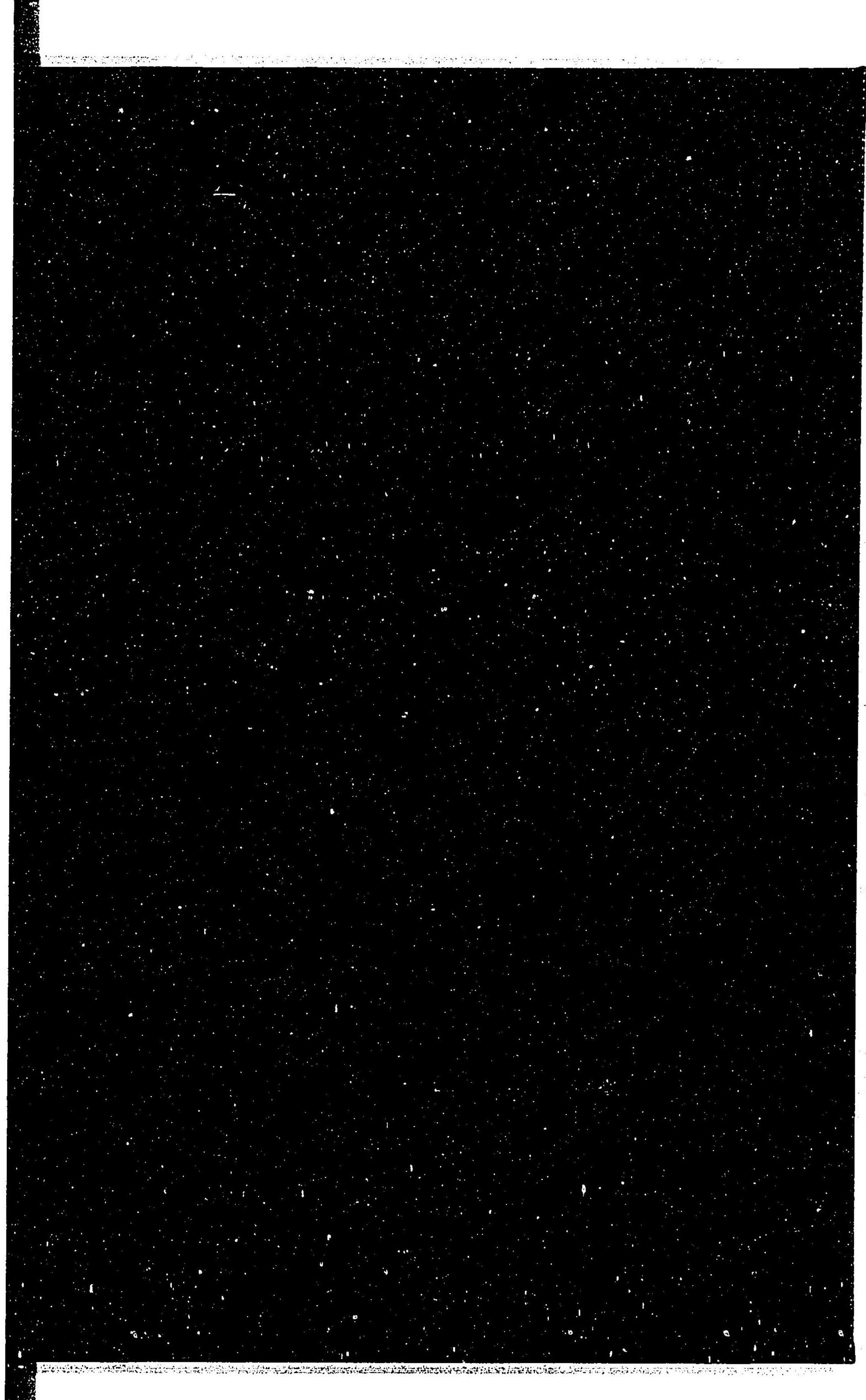
|          |          |          |          |          |          |          |          |          |          |          |          |          |          |          |          |          |
|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|
| 鑛物學      | 新撰       | 新撰       | 新撰       | 新撰       | 新撰       | 新撰       | 新撰       | 新撰       | 新撰       | 新撰       | 新撰       | 新撰       | 新撰       | 新撰       | 新撰       | 新撰       |
| 文學士飯塚啓君著 | 文學士飯塚啓君著 | 文學士飯塚啓君著 | 文學士飯塚啓君著 | 文學士飯塚啓君著 | 文學士飯塚啓君著 | 文學士飯塚啓君著 | 文學士飯塚啓君著 | 文學士飯塚啓君著 | 文學士飯塚啓君著 | 文學士飯塚啓君著 | 文學士飯塚啓君著 | 文學士飯塚啓君著 | 文學士飯塚啓君著 | 文學士飯塚啓君著 | 文學士飯塚啓君著 | 文學士飯塚啓君著 |
| 文學士飯塚啓君著 | 文學士飯塚啓君著 | 文學士飯塚啓君著 | 文學士飯塚啓君著 | 文學士飯塚啓君著 | 文學士飯塚啓君著 | 文學士飯塚啓君著 | 文學士飯塚啓君著 | 文學士飯塚啓君著 | 文學士飯塚啓君著 | 文學士飯塚啓君著 | 文學士飯塚啓君著 | 文學士飯塚啓君著 | 文學士飯塚啓君著 | 文學士飯塚啓君著 | 文學士飯塚啓君著 | 文學士飯塚啓君著 |

21-21-39

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 農 | 農 | 園 | 園 | 稻 | 栽 | 日 | 農 | 氣 | 微 | 肥 | 植 | 植 | 土 | 農 | 農 |
| 用 | 產 | 藝 | 藝 | 作 | 栽 | 培 | 用 | 候 | 及 | 菌 | 物 | 物 | 地 | 業 | 學 |
| 器 | 製 | 各 | 通 | 改 | 培 | 汎 | 化 | 土 | 壤 | 料 | 營 | 病 | 改 | 經 | 政 |
| 具 | 造 | 各 | 良 | 各 | 汎 | 化 | 化 | 壤 |   | 養 | 理 | 良 | 濟 | 汎 | 科 |
| 學 | 學 | 論 | 論 | 論 | 論 | 論 | 學 | 學 | 論 | 學 | 學 | 論 | 學 | 論 | 學 |
| 農 | 農 | 農 | 農 | 農 | 農 | 農 | 農 | 農 | 農 | 農 | 農 | 農 | 農 | 農 | 農 |
| 學 | 學 | 學 | 學 | 學 | 學 | 學 | 學 | 學 | 學 | 學 | 學 | 學 | 學 | 學 | 學 |
| 士 | 士 | 士 | 士 | 士 | 士 | 士 | 士 | 士 | 士 | 士 | 士 | 士 | 士 | 士 | 士 |
| 西 | 楠 | 高 | 高 | 橫 | 田 | 橫 | 井 | 井 | 井 | 木 | 木 | 山 | 山 | 石 | 石 |
| 村 | 君 | 橋 | 橋 | 井 | 中 | 井 | 上 | 上 | 上 | 下 | 下 | 大 | 大 | 坂 | 坂 |
| 榮 | 著 | 久 | 久 | 時 | 節 | 時 | 正 | 正 | 正 | 義 | 義 | 乙 | 乙 | 橋 | 橋 |
| 十 | 著 | 四 | 四 | 敬 | 三 | 敬 | 賀 | 賀 | 賀 | 道 | 道 | 丙 | 丙 | 樹 | 樹 |
| 郎 | 著 | 郎 | 郎 | 君 | 郎 | 君 | 君 | 君 | 君 | 君 | 君 | 君 | 君 | 君 | 君 |
| 君 | 著 | 君 | 君 | 著 | 君 | 著 | 著 | 著 | 著 | 著 | 著 | 著 | 著 | 著 | 著 |
| 著 |   | 著 | 著 |   | 著 |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 工 | 新 | 應 | 應 | 分 | 昆 | 森 | 提 | 森 | 獸 | 乳 | 水 | 家 | 畜 | 畜 | 養 | 食 |
| 業 | 撰 | 用 | 用 | 析 | 林 | 要 | 醫 | 林 | 學 | 產 | 禽 | 產 | 產 | 產 | 蠶 | 物 |
| 政 | 應 | 機 | 化 | 化 | 保 | 造 | 護 | 林 | 汎 | 產 | 禽 | 各 | 汎 | 汎 | 製 | 絲 |
| 策 | 重 | 械 | 學 | 學 | 學 | 學 | 學 | 學 | 論 | 業 | 學 | 學 | 論 | 論 | 論 | 論 |
| 學 | 學 | 學 | 學 | 學 | 學 | 學 | 學 | 學 | 學 | 學 | 學 | 學 | 學 | 學 | 學 | 學 |
| 士 | 士 | 士 | 士 | 士 | 士 | 士 | 士 | 士 | 士 | 士 | 士 | 士 | 士 | 士 | 士 | 士 |
| 窪 | 窪 | 重 | 重 | 重 | 窪 | 窪 | 窪 | 窪 | 窪 | 窪 | 窪 | 窪 | 窪 | 窪 | 窪 | 窪 |
| 田 | 田 | 見 | 見 | 見 | 田 | 田 | 田 | 田 | 田 | 田 | 田 | 田 | 田 | 田 | 田 | 田 |
| 隆 | 隆 | 道 | 道 | 道 | 隆 | 隆 | 隆 | 隆 | 隆 | 隆 | 隆 | 隆 | 隆 | 隆 | 隆 | 隆 |
| 次 | 次 | 之 | 之 | 之 | 次 | 次 | 次 | 次 | 次 | 次 | 次 | 次 | 次 | 次 | 次 | 次 |
| 郎 | 郎 | 君 | 君 | 君 | 郎 | 郎 | 郎 | 郎 | 郎 | 郎 | 郎 | 郎 | 郎 | 郎 | 郎 | 郎 |
| 君 | 君 | 著 | 著 | 著 | 君 | 君 | 君 | 君 | 君 | 君 | 君 | 君 | 君 | 君 | 君 | 君 |
| 著 | 著 |   |   |   | 著 | 著 | 著 | 著 | 著 | 著 | 著 | 著 | 著 | 著 | 著 | 著 |





78

3

013753-000-2

78-3

比較宗教学

マクス・ミューレル/著

M40

ABA-0242



